最新女子國文

巻一

375.9
Ma20
資料室

42249
教科書文庫
4
810
42-1928
200030
1546

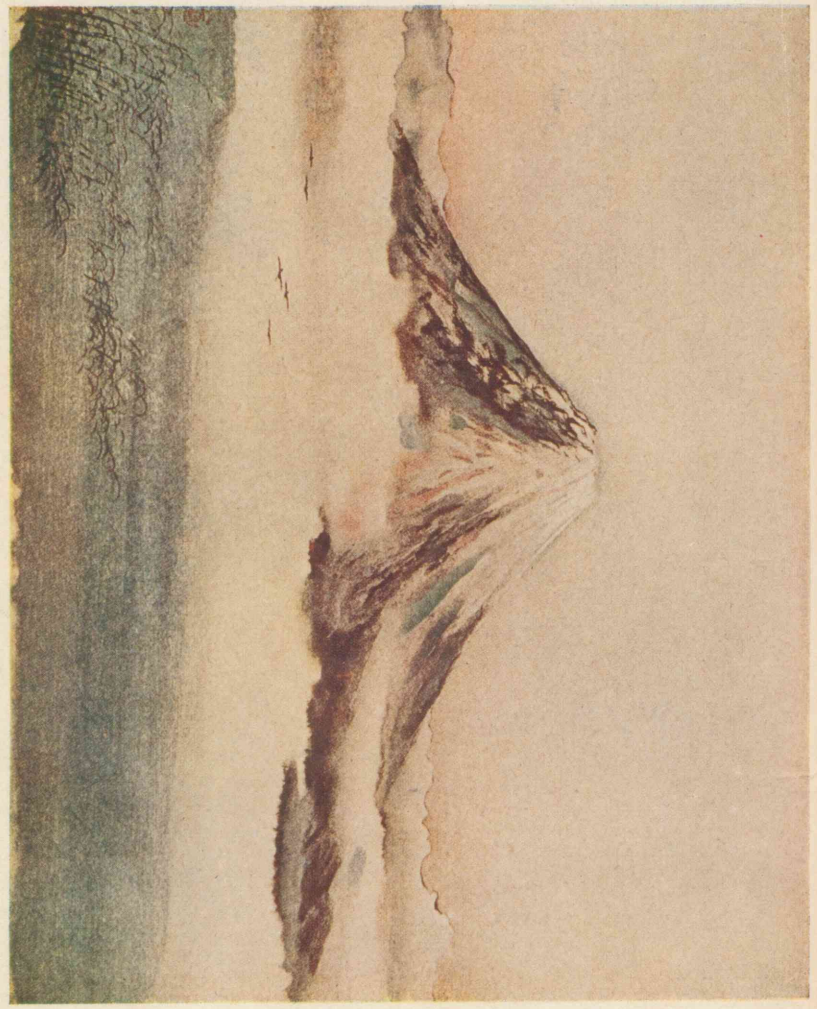
昭和三年一月三十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

最新女子國文

文學博士 松村武雄編

P

資料室
375.9
M20



（蘭川華窓筆）　山　士　富

廣島大學圖書之印

本書は國語及び國文學の本質に顧み、其の編纂法に於て舊套以上に一段の進出を試み、更に各卷並に通卷の綜合的體系と意趣とを重視し、國語教授上最新の用書たるに堪へしめんことを期したるもの、編者はこれが適當なる運用に依りて本科の目的の完全に達成せられんことを切望す。

廣島大學教授
45719
圖書

最新女子國文　卷一　目次

一　日の出る前……島崎藤村　一
二　春の詩（詩）……七
一　木の芽草の芽……白鳥省吾　七
二　山の歡喜……河井酔茗　九
三　千本松原……伊藤左千夫　二
四　かくれん坊……野上彌生子　三
五　汝の母……姉崎正治　六
六　人は我が影……山本良吉　三七
七　伊勢より……五十嵐力　四〇
八　短歌選……落合直文　竹の里人　四五

九　五月雨の頃……萩原井泉水　四九
一〇　童謠二篇（詩）……北原白秋　五四
一　雨……西條八十　五六
二　蝸牛の唄……小川未明　五八
一一　姉の後悔……渡瀬庄三郎　六七
一二　螢の話……五十嵐力　七〇
一三　湖山長者……高安やす子　七六
一四　水の都……坪内雄藏　八二
一五　夕立……金子元臣　八五
一六　富士山……九二
一七　詩二章（詩）……九二
一　海邊の虹……北原白秋　九三
二　松露の歌……加藤介春　九六

一八　汽車……北原白秋　九八
一九　夏休……幸田露伴　一〇五
二〇　太平洋の落日……水谷まさる　一〇八
二一　名人團平……鈴木鼓村　一一四
二二　兒獅子の自覺……松村武雄　一二一
二三　母の面影……夏目漱石　一二五
二四　希望（詩）……八波則吉　一三五
二五　漸進主義……八波則吉　一三七
二六　學藝……三浦梅園　一四二
二七　初秋の窓から……相馬御風　一四四
二八　蟲供養……三宅やす子　一五〇
二九　月と植物……三好學　一五五
三〇　書翰二通……一五八

一　觀月の誘ひ……大塚楠緒子　一五八
二　萩の一もと……梶原緋佐子　一五九
三　かぐや姫……尾上八郎　一六〇

自修文

一　ウイルヘルムーテル……松村武雄　一七一
二　蜘蛛の絲……芥川龍之介　一七八

最新女子國文　卷一　目次　終

帝國大學圖書之印

最新女子國文　卷一

島崎藤村
詩人、小說家。名は春樹。明治五年長野縣生。

一　日の出る前

島崎藤村

鳥の世界は暗くて、いつまでも夜が明けませんでした。鷹だの、鴉だの、七面鳥だの、鷺だの、それから鶴だの、鷄だの、いろ〳〵な鳥が首を長くして、もう夜が明けさうなものだと言つて居ました。鶯や雀や鴛鴦まで皆と一緒に居て、おてんたうさまの出るのを待ちました。

どうしたことか、いつまで待つても同じなものですから、

鷹は待ちくたびれ、鴉は欠伸をし、雀はぶつ〳〵言ひ、七面鳥

でも鷄でも日の光にかつゐてしまひました。鳥の中でも鶯は好い聲で夜の歌を歌つて居ました。氣の短い七面鳥などは待遠しがつて、

「鶯はのんきだなあ。いつまであんな夜の歌など歌つて居る氣だらう。」と言ひました。

「だれだ。この夜の長いのに、まだこれでも短いやうなこと

を言つて居るのは。」と怒つて居るのは鴉でした。

「鳥の世界には夜は明けないかも知れない。」と鷹が言出しました。

「とても私は鷹のやうな氣長なことを言つて、おてんたう様の出るのを待つて居られない。」と七面鳥は言ひました。

鳥仲間には、默つてみんなの言ふことを聞いて居るやうな鶯も居ました。鶯は氣の短い七面鳥や物をほじくりたがる鴉のおしやべりを煩さがつて、獨で遠い先の方のことを夢に見て居ました。そんな遠い〳〵先の方の日の出の夢を見て居ました。

「どうです、皆さん。」とその時言出したのは鴉でした。

「一體おてんたうさまは東の方から出ると定つたものでせうか。」

「鴉がまた何かほじくり出した。」

と言つて、鷹は笑ひました。

「いや、うつかりすると、おてんたうさまは西の空からも、南の空からも出ますぜ。」と鴉が言ひました。

「大きにさうだ。私達は東の方ばかり待つて居た。どんなすばらしいおてんたうさまが思ひもよらない方から出て、西の空から夜が明けないとも限らない。」

と言ふのは七面鳥でした。

いつまで待つても夜が明けないものですから、鳥仲間は

おてんたうさまの出る方角にさへ迷ひました。そしてがやがや言騒ぐうちに、しまひには皆くたびれてしまひました。中でも氣の短い七面鳥や、おしやべりの好きな鴉などは、もう夜明を待つ元氣もないほどに、がつかりしてしまひました。

「私達は一生おてんたうさまも見ずに死ぬのだ。」

七面鳥はこんなことを言つて鳥仲間を笑はせました。

そのうちに鷄は他の鳥の知らないやうな「力」をつかみました。鷄は目をさましたのです。そして夜明の近いことを知つたのです。第一に、身を起しました。それから鴉の言つたことなどに迷はされずに、確におてんたうさまの出

るのは東の方だと思ひまして、ありたけの聲を出して勇ましく鳴きました。

途方もない鷄の叫び聲に、驚いたのは鳥仲間でした。日頃遠見のきくのを自慢にして居た鷹の目にすら、そんなおてんたうさまらしいものは見えもしません。鷄に一ばい食はされたと言ふのは鴉でした。あの鷄はおほかた寢ぼけたのだらうと言ふのは七面鳥でした。そのくせ、鴉でも七面鳥でも夜明を待ちくたびれて、うと〳〵と半分夢を見て居たのです。

まだ空は暗かつたのですが、しかし鷄は一度鳴いた自分の聲に勵まされました。二度目の時をつくる頃にはその

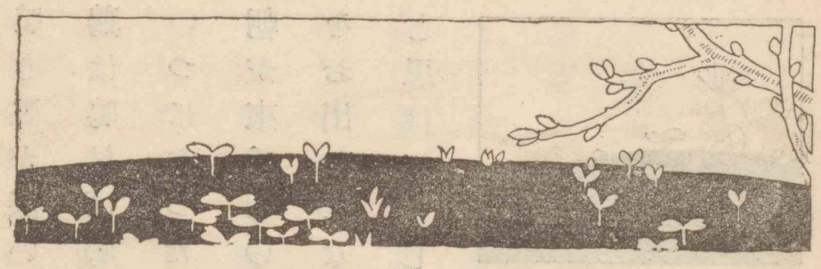
鳴き聲が深い霧の中に響き渡りました。その時になつて鷄は鳴けば鳴くほど自分に力の出て來るのを知りました。いつになつたら夜が明けるかと思ふやうな鳥の世界にも朝が來て、あのあか〳〵としたおてんたうさまが美しい顏をお出しになるのも、もうそんなに遠いことではなからうと思はれました。「をさなものがたり」

白鳥省吾
詩人。明治二十年宮城縣生。

二　春の詩

一　木の芽草の芽　　白鳥省吾

草の芽は
黑い土から出て



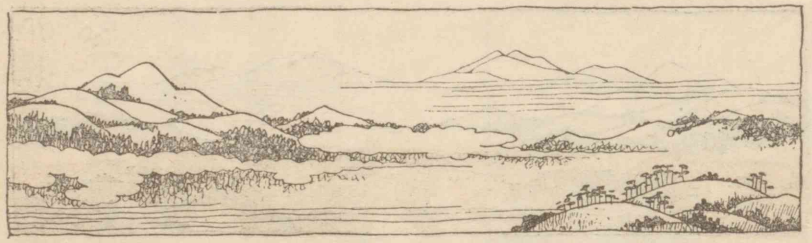
きれいに光つてゐる。

木の芽は
かたい枝から出て、
やはらかく光つてゐる。

みんな
露で顔を洗つて、
温かい光をうけるからだらう。

草の芽、木の芽、

河井醉茗
詩人。名は又平。明治七年堺市生。



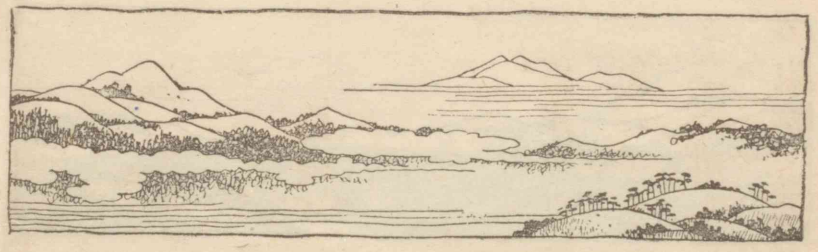
ひくいところや
たかいところから、
みんな春が來たとうたつてゐる。

「日本童謠集」

二　山の歡喜

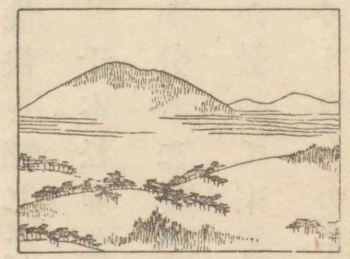
河井醉茗

あらゆる山が歡んでゐる
あらゆる山が語つてゐる
あらゆる山が足ぶみして舞ふ、躍る
あちらむく山と
こちらむく山と
合つたり



離れたり
出てくる山と
かくれる山と
低くなり
高くなり
家族のやうに親しい山と
他人のやうに疎い山と
遠くなり
近くなり
あらゆる山が
山の日に歡喜し

伊藤左千夫
歌人、名は幸次郎。千葉縣の人。大正二年歿、年五十。



山の愛に點頭き
今や
山のかゞやきは
谷いつぱいにひろがつてゐる

「明治大正詩選」

三　千本松原

伊藤左千夫

沼津の町の細い横丁を二曲り三曲りして、昔の東海道通へ出た。右へ少し行つて町を出てしまふと、小さな川がある、子持川とかいふさうだ。土橋を渡ると、左側の萱葺屋根の家から、筒袖を着て下駄を穿いた五十ぐらゐの肥つた男

が出て來て「今、馬車が出ますが、如何ですか。」と言ふ。「いや、わしは千本松原へ散歩に來たのだが、首塚といふのはどの邊か。」と問うた。すると其の男は丁寧に腰を屈めて、「さうで御座いますか、御首樣は、此の川のふちを眞直に松原へ這入れば、すぐ解ります。」と言つた。其の音聲から態度まで、如何にも善良な人らしく思はれた。苟且(かりそめ)のことながら予は頗る愉快を感じた。

千本松原はすぐ眼の前に横たはつて居る。幾萬本あるか分らぬ程の松が、背くらべをして雲を突いて居る。天氣が曇つて來て雨模樣であるから、松の梢が雲に屆いて居るやうだ。のそ〳〵歩いて行くと間もなく松原で、林中の砂原に杉丸太の小さな鳥居がある。八尺ばかりの石碑が立つて居る。表に「首級冢碑」と記し、明治三十三年に髑髏が百餘り茲に露出したのを、同三十五年五月、土地の人が相謀り、石を立てて之を弔うた由を書いてある。天正八年、武田勝頼が、北條氏政と此の地に戰つた時、首級を茲に埋めたのであらうとのことである。今は日露戰爭の最中だが、是が百年たち二百年たち三百年たつ間に、雨に潰え風に損なはれて幾萬の髑髏が滿洲の野に露出するやうなことはないであらうか。若し又さういふことのあつた時は、此の地の人のやうな優しい心掛の人があつて、石を立てて厚く弔つてくれるやうなことがあらうか。思へば、此の百髑髏などは

幸福と言はねばならぬ。閑雅清淨な地に祭られて、土地の人々には「お首様、お首様」と崇められて居る。古來戰場の露と消えた人は數かぎりなくあるが、三百年はおろか、二百年はおろか、百年の後にも、其の跡を認め得るものが幾許あるであらうか。

松原の中へ這入つて見ると、外から見たよりも一層立派な松原である。三かゝへもある古木が相競うて、十丈以上に高く立つて居る。其の壯快な趣は何とも形容が出來ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽の不自然なのは極めて厭味なものであるが、風が砂を吹きさらつて、自然に根上りとなつたのは頗る趣がある。巨大な幹や繁り繁つた枝や

葉をしつかりと支へて居る根張りの力が、十分其の形に現れて居る。實に見る目も氣持がよい。此の高大な壯快な趣は、到底舞子などの及ぶ所ではない。

松原を出ると、芝原に空屋らしい家が一軒ある。其の前を通つて、波打際へ降りて見る。海は極めて穩かで、伊豆の眞城山・大瀨の崎などが手に取るやうに見える。西の方、久能山・三保などは薄黑い雲のやうである。のたり〳〵と波が寄せる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中にあるのが殊に美しく見えるので、波の引いた所へつけ入つて取らうとする。又波がすぐ寄せ

舞子　播磨國垂水村の海濱。

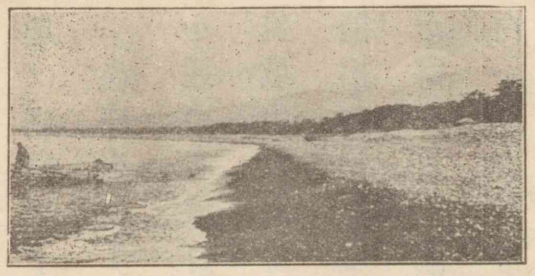
眞城山・大瀨の崎　共に伊豆國田方郡に在る。

久能山・三保　共に駿河國安倍郡に在る。

て來る。波が引く。取らうとする。又波がすぐ寄せ返す。とう〳〵片足の足袋を濡らしたが、其の小石も取れなかつた。波が小石を惜しむやうに感じた。三十間ばかりの沖を、鵜が三羽かづいては泳ぎ、かづいては泳ぎ、東の方へ泳いで行く。鈴川の邊から小舟が二艘ゆた〳〵と艪を押して來る。のたり〳〵の波と能く調和して居る。煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりとして來た。

鈴川　駿河の一驛。

六代松　平維盛の長子六代、源頼朝のため、此處で刑せられようとした時、丁度、鎌倉から赦免の使者が來て、刑を免れた遺跡。



千本松原

予は六代松を見る心組であるから、此の邊から上つたらよからうと氣付いて、松原に向つて上つた。松原を通り抜けて里へ出る道がついて居る。其の道端の松の中に荷車を置いて、づんぐりした親爺が砂利を磯から荷車へ運んで居る。予が其の親爺に六代松の所在を尋ねると、親父は先づ鉢卷の手拭を外し、姿勢を正して答へた。「はい、六代松で御座いますか。私は此の村の者ではありませんが、人樣に尋ねられてもと思ひまして、聞いて置きました。六代松と申しても、松はありませぬ。あそこに墓場があります。向うの垣根と其の墓場との間を右へ曲れば、向うに小さい森が見えます。其の森の中に標の石が立つて居ります、はい。」先の馬車を勸めた男といひ、今此の男といひ、予は其の篤實なのに深く心を動かしたのである。

成程、六代松といふ松はない。常磐木の小さなこんもりとした森の中に、さゝやかな石が立つて居つた。非常に大きな松があつたとのことだが、今は其の根株の跡すら分らぬ。幾百の生首を一纏にして埋めた事蹟とは違つて、危い命を助かつた人の悅、其の從者共の悅、助けた人は勿論、守護の任に當つた北條主從に至るまで、嬉し涙にくれた樣が、眼の前に見える心地がするのである。

助けた人　六代の命が助かつたのは、僧文覺が賴朝に賴んだ爲であつた。北條時政。

予は松原の中を縱に通つて居る道を歸つて來る。女の子供の松葉を搔いて居るのが幾組もある。道理で松原は塵も止めぬ程に掃除されて居る。

此の松原に就いて大いなる愉快を禁じ得ぬことがあつ

た。それは十餘町も往復する間に、松葉搔に幾組も出逢うて、此の地方の者が松原で薪料を求めることが知れたに拘らず、篠一本・小松一本、刃物を以て切つた跡を見なかつたことである。予はかく心付いてから、餘程注意して見たが、遂に切取つた跡も折取つた跡も認め得なかつた。如何にも人氣の篤實な地であるといふことが明らかに察せられる。此の立派な松原が少しも損なはれずに今日に傳はつたのも決して偶然ではない。官林のことであるから、妄りに竹木を切つてはならぬとなつて居るには違ないが、人氣が篤實でなくてどうしてそれが行はれよう。何の辨もない兒童に至るまで、少しも其の禁を犯さぬといふのは理窟の力

でなくて、民衆の美質に依ることは疑ふ餘地もない。始めて沼津に來て、何とはなしに平和の趣を感じた予は、今はそれを知識的に觀察し得たのである。富士の眺も美しい、靜浦の眺も美しい、千本松原も美しい。併しながら、沼津の人氣の篤實な、眼に見えない美しさにはとても及ばないであらう。

靜浦　千本松原から東南の方伊豆に至る海濱の稱。

此のやうなことを考へながら急いで歸つて來ると、雨がぽつ〳〵落ちて來た。予が松原を出ようとすると、松林の小高い所に、十二三の男の子が三人遊んで居る。其處に居た犬が、予を見て俄に吠出して、予に向つて走つて來る。男の子は頻りと犬を叱る樣子であつたが、予は犬の吠えるのには眼もくれないで出て來る、犬は益、吠える。やがて男の子は走つて來て、犬を捕へて、吠えさせない。予は茲にも一點の美を認めて、もと來た子持川の脇へと出た。見渡した沼津の宿はほんのり霞をこめて、春雨が靜かに降つて居るらしい。

四　かくれん坊

野上彌生子

野上彌生子　小說家。名は八重子。明治十九年大分縣生。

それは利子さんが七つの頃。故郷の或る小さい村で起こつた一つの出來事でありました。

利子さんはおひるをすますと、いつものやうに下の妹をおんぶした子守の少女に連れられて、近くのお稻荷さんの

境内の方へ出掛けました。丁度何月であつたか、それまではつきりした記憶はないのですが、自分も子守も路々麥笛を吹きながら歩いてゐた事と、境内の手前にある荒地の原つばに、背丈ほどの曼珠沙華が爐の火のやうに眞赤に咲續いてゐた事が、未だにはつきり印象されてゐる事から考へ合せて、何でも秋のお彼岸の頃だつたらうと思はれます。

松や杉の淺い森になつてゐる境内に這入つて見ると、遊び仲間の近所の子供達はもう四五人集まつて、めんこをしたり、毬をついたりしてゐました。子守女は十二ばかりで、その一群の子供の中では一番の年長者でしたから、遊戯でも何でもいつも專横な指揮者となりました。その時も彼

女は直ぐと皆を自分の周圍に召集して、隱れん坊をしてあそぼうと言ひ出しました。

「じやんけんぽ。」

「じやんけんぽ。」

「合ひこでしよ。」

めい〳〵小さい手を振つて、紙を出したり、鋏を出したりした末に、鬼が極まりました。不幸な任命は利子さんの上に落ちたのでした。

「さあ孃ちやんが鬼ですよ、目隱ししてその鳥居のとこに立つてらつしやい。」

子守が遊戯となると不斷と位置を換へたやうな、こんな命令的な態度に出て來る事は、利子さんの小さい胸にいつも一抹の憤を釀させずにはおきませんでした。でも、それに反抗しては、たゞ一人の遊び相手も見出せないほど、彼女はその小さい仲間での暴君でありました。利子さんは脣を嚙みつゝも、默つて指定された赤い鳥居の下へ行つて、袖で顏を蔽はなければなりませんでした。

「まだよ、まだよ。」

子供達があわてて逃げて行く草履の音がばた〳〵と後の方に入亂れて遠ざかりました。其處此處といゝ隱れ場を探してゐるらしいざわめきも感じられました。一二分

の後、凡てが落着くと、再びその暴君の聲で、

「鬼さん、いゝよ。」

と合圖がかけられました。その聲は、それに依つてその聲の出た方角を推知されないために、不自然な壓しつけた調子で呼ばれました。利子さんは顏から袖を放して、袖の裡につぶつてゐた目を開けました。而して先づまはりを一遍ぐるりと見廻しました。當てどはないながらも、物を追うてるのだといふ思に鋭くされた視線が、利子さんの立つた地點を中心として、傍の手洗の陰・古楠の洞・山躑躅の暗い繁みの上を追うて、不規則な半圓を描きました。もとよりそんな處に潛んでゐる人影はありませんでした。多分裏

の林の熊笹の中か、崖の横穴に群つて隱れたのだと見當はついても、それを一人で探しに行く事は、利子さんには可なりの恐怖でありました。

利子さんは二三歩其方へ歩みかけてから、又足を止めました。何だか、さうしてゐると、身のまはりに不思議な淋しいものが、群つて來るやうな氣がしました。

今まで愉快らしく利子さんのおかつぱの上から、足許の草原から、あたりの木立の黑い幹、青い枝の間に麗かな美しい光の兒等を踊らしてゐた太陽は、俄に機嫌を惡くした人のやうに、灰色の幕の內に隱れました。その跡を封じ込めた鈍い曇は、周圍の景色に陰鬱な、もの悲しい陰翳を隈取り

ました。その裡に湛へられた異樣な靜けさが、しんとした冴えを持つて利子さんの胸に迫つた時、利子さんは我ともなく身體を縮めました。

「いーせー。」

無意識に口を突いて出た子守の名は、何等の聲にも答へられず、空しい響をして森の奧へ消えて行きました。その時、ふと家の事が意識に上ると、淋しさも心細さも、不安も恐怖も、忽ち一塊りの暗い悲に溶け合つて、涙が止めどもなく流れ出ました。自分の家が此處から一町や二町の手近なところにあるやうには思へないのでした。何處か目も及ばぬ遠い〳〵空の果に遠のいて、自分だけがたつた一人、此

處に取殘されてゐるかの如く感じられました。

「母さん、母さん、母さん――。」

と、そのまゝ駈出したい思の中には、遊び仲間に對する小さい自尊心と「鬼」になつてゐるといふ責任の念とは、どうする事も出來ませんでした。利子さんは踏出しもし得なければ、退きもならぬ當惑の裡に、そのまゝ松の木の下に佇んで、しく〳〵泣いて居りました。「新しき命」

五　汝の母

姉崎正治

姉崎正治
宗教哲學者。文學博士、東京帝國大學教授。號嘲風。明治六年京都市生。

最近の世界大戰に於て、イギリスの一飛行士官が、敵たるドイツの飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地に落ちるのを見ると共に、それに乘組んで居る敵兵のことを思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乘組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居た。敵ながら今まで空中に飛翔して居た人のことを思ひ、物の哀を覺えて、其の死體を片附けてやらうと、胸のポケットの邊にさはると、其處に堅い物があつた。之を搜り出して見ると一葉の寫眞で、それには「汝の母」と書いてある。即ち今戰死した士官は、空中戰にも常にポケットに母の寫眞を藏して居たのを見て、其の士官は一層哀に思ひ、先づ敵の屍體を味方の塹壕に持歸り、再び自分の機に乘じて尙一戰した。其の日の戰にも武運强く、安全に

味方の戰線の後に歸つた。

其の後、イギリス士官は此の射殺した敵と其の母のことを思ひ、それにつけて自分の身の上、且は早くに亡くなつた自分の母のことを考へて感慨に堪へず、敵士官の姓名を辿つて、彼が母へ一書を送つた。其の書面は左の如くである。

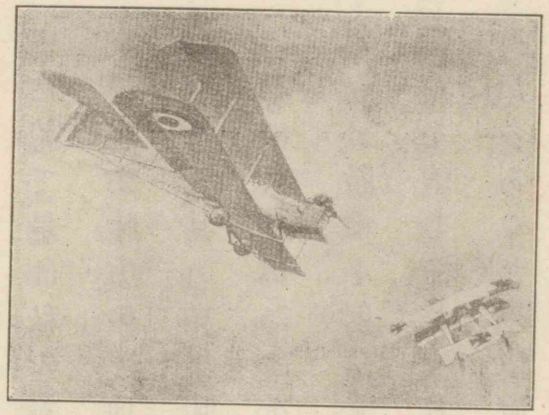
自分はイギリスの飛行士官です。何月何日、私は敵たるドイツの一飛行機を射落しましたが、其の敵兵は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、其の母御たるあなたに此の手紙を差出します。

私はあなたの御子息を殺しました。併し其の人を

憎んだのでもなければ、其の人の母御たるあなたの悲を知らない筈もないのです。唯戰爭といふ殘忍な仕事に於て、是は私の義務でした。敵士官、卽ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果、味方は反對に攻擊を受けて、幾人かの兵は其の爲に命を失つたでせう。此の不幸を防ぐ爲、私は敵機を射落しましたが、其の乘組士官の身體に敬意を表し、それを片附けようとする時に、其の人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるの

を見て羨ましく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親があり、死ぬまで其の寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分はぢつとしては居られません。殺した私の手紙を見ては口惜しくも思はれませうが、私としては、彼の人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを悲の中にも禁じ得ません。



空中戰

私が彼の人を殺したのは、戰爭といふ殘忍な惡魔のしたことです。あなたも又亡くなつたあなたの御子息も此のことを思うて、私の殺人を赦して下さるでせう。そして又彼の人の亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書く此の手紙は、彼の人と二人の魂が一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も震へて書けません。

此の手紙はイギリス軍の本營から、中立國の手を經て、ドイツの宛名の人に屆いた。一人の兒を喪つた母が、之を讀んだ時の感は思ふも涙の種である。そして此の婦人は數

日の後長々と手紙を書いて、彼のイギリス士官へ送つた。其の大意は下の如くであつた。

御手紙の着く前に、悴の戰死は知つて居りましたが、其の戰死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は御察し下さい。通常ならば、あなたを悴の仇敵といふ所ですが、御述懷に接しては、其の仇敵が却つて蘇生した悴となり、此の母に手紙を寄せてくれたやうに思へます。あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がすると言はれるやうに、あなたの御手紙は、私に取つては戰死した悴の手紙としか思はれません。あなたは悴を殺したと言は

れ、又事實其の通に違ないことは勿論知つて居ますが、殺すも殺されるも共に各、の國の爲で、人として何等の怨も仇もある譯のないことは、お互に明白なことでせう。其の怨もない者が互に殺さうとするのは、畢竟は戰爭の爲です。是に就いては私は何も申しません。唯仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私も亦あなたが死んだ悴の身代りのやうに思へるのは、何たる不思議のことでせう。

私には三人の男子があり、戰死したのは其の末子ですが、兄二人もやはり戰線に出て居て、何時弟と同じ運命になるかも計られません。併し私は末子の戰死し

た爲に、あなたといふ新たな子を得ました。戰爭が濟み、平和の時が來、そして兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにも此の家へ一度來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。其の時には、あなたは死んだ忰とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭に何時までも滯在して戴きたい。其の日の早く來ることを神に祈つて居ります。

そして最後には「汝の母」と、彼の寫眞に書いてある通に書いてあつた。「光あれ」

山本良吉
教育者。武藏高等學校教頭。金澤市の人。

六　人は我が影

山本良吉

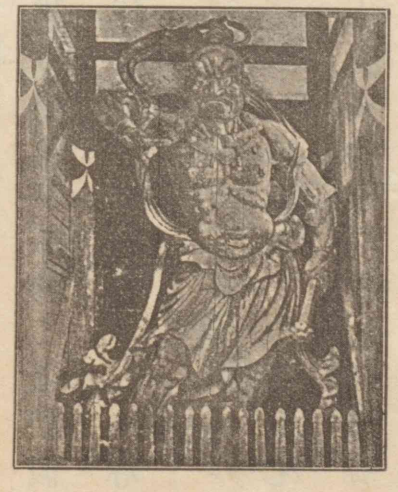
十人十色、人の心は樣々なりと雖も、世の中にはさしたる惡人あるものにあらず。人も我も、心の本に於ては相似たり。然るを、其の間に著しく親疎、冷溫の別の生ずるは、專ら我が心の向けやうに依るなり。

古は「人を見ば敵と思へ。」との諺さへありき。我よりして人を敵と見ば、人は必ず眞の敵となるべし。二人相逢ふ時、誰か始より互に敵對せんと思はん。然るに、惡意なき者をも惡意ある如くに想ひ定め、其の氣持にて之に對すれば、彼も亦我を惡意ありと思ひ、我に敵意を挾まん。敵は自ら作

悲母觀音　（狩野芳崖筆）

るものなり。一度惡しく思へば、髮の結びやう、着物の着方、物言ひ、笑ひ方まで總べて不快の種子となり、親しかるべき者さへ却つて相惡むに至るべし。女子が他の女子に對する時、動もすればかゝる敵對の念を挾むことあるものなれども、是甚だ謂はれなし。女子は互に相助くべきものにして、決して相背くべきものにあらず。

若し一切の人は皆我が友なりと思ひ、好意・溫顏を以て之に接すれば、たとひ初には多少不快の念を抱きたる者にても、自然に我に馴染み、我に好意を持つに至るべし。繪畫・彫



仁王像

刻にても、怒れる貌の者を見れば心穩かならず、溫厚・圓滿の相を見れば氣持よし。況や人と人との交際に於て、我より好意・溫顏を以てするに、誰か惡意を起すものぞ。縱令何程好意・溫顏を以てしても尙惡意を抱く者あらば、是我が身の行屆かざる故なりと思ひ、益、好意を盡くすべし。我が不行屆を忘れて、直ちに人を責むるは宜しからず。

人の一生は働き合、助け合なり。互に相助け、共に働き合ひて、我が家をも國をも聊かにても善き方に進むること、是人生の目的なれば、少き頃よりして、他の人々と共に働き、互に相助け合ふ習慣を養はざるべからず。ましてや三四人の友人、又は三十・五十の同級生と、聊かのことにて心を損じ、

相背くが如きは、恥づべき極みなり。「大正女子修身書」

五十嵐力
文章家、文學博士。早稲田大學教授。明治七年米澤市生。

山田
三重縣宇治山田市。

外宮
舊山田にある。

內宮
舊宇治にある。

五十鈴川
神路山より發し內宮の神境を過ぎて二見の海に入る。

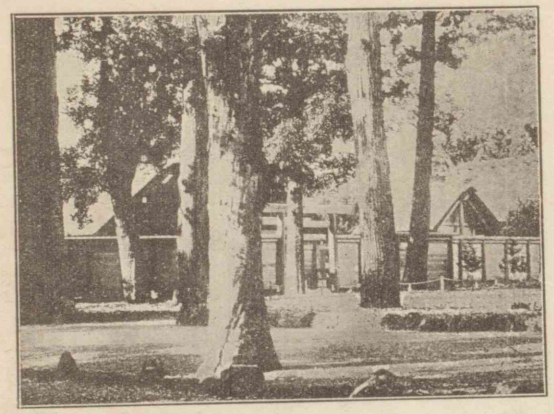
又御裳濯川ともいふ。

七　伊勢より

五十嵐　力

俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に內宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に內宮の畏さは言語に盡くせません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口すゝいで、それから頭上の木の枝に猿の遊ぶのを見、名も知らぬ鳥の奧深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠青色の苔にさびた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並んでゐる間を

たどつて暫く進むと、やがて木立の奧、塀の彼方に千木、堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の內に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奧にまばらに立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さな祈を捧げました。



外宮

さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が柏手を打つて

西行法師　有名な歌人、行脚僧。建久元年歿、年七十三。

忝さに　何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ。

は、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、小さい敬虔な姿を思ひ浮かべました。

直き清き強き心をあらはして
すくすく立てりたふと神杉

大廟は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に表したもののやうに思はれます。

私どもは內宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つて、押戴いて懷にし、御手洗川に口すゝいで、をりしも聞える笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、この神

字治橋　五十鈴川にかかる。

赤福餅　名物の餡餅。

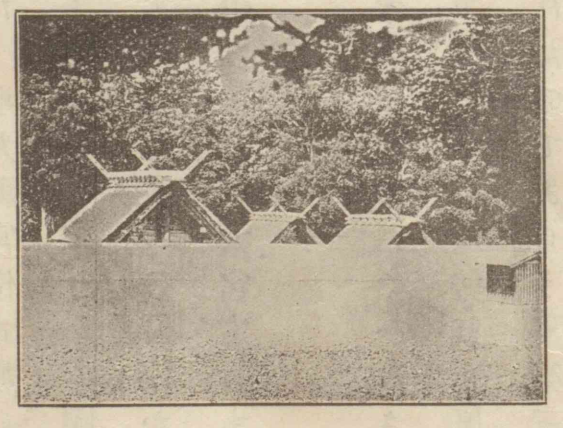
朝熊岳　神路山の東北。

神路山　內宮神境の山林。

境を辭しました。さうしてかへりみかへりみ宇治橋を渡つて、昭憲皇太后のめで聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に走らせました。

御社のうしろの
御門をろがみて
ひとかけの苔を
いたゞき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃



內宮

路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心にかなつた謂はれを考へました。皇大神宮儀式帳に、

度會（わたらひ）の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎭ります國と悅び給ひて、大宮定めまつりき。

度會の國　伊勢度會郡。

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなさを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしさを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。最後には、一切の消極的煩累にわづらはされずして、皇御孫（すめみま）に率ゐられる大和民族の積極的、光明的發展を見そなはすに、都合のよい、氣の落着く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり〳〵車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、いつか朝熊岳の麓に着きました。「我が書翰」

落合直文　歌人、國文學者。仙臺の人。明治三十六年歿、年四十三。

八　短歌選

落合直文

○

かへりきてぬぎし衣の袖よりも二ひら三ひら散る櫻かな

こゝろみに石をひろひて投げて見んねむるが如

し春の川水
よき種と聞きて買ひ來て植ゑて見しわがおろか
さよ朝顔の花
少女子は摘みてくだきて捨てにけり薔薇の花に
は罪もあらなくに
原町にめしひ二人が杖とめて秋
の夕を何語るらん
落栗におどろかされて蟷螂のい
かれるさまもおもしろきかな
このまゝに永くねぶらば墓の上に必ず植ゑよ萩
の一むら

落合直文

竹の里人
俳人、歌人。氏名は正岡常規（つねのり）、俳號子規。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

猿曳の背にねぶりゆく猿の子をおどろかしても
降る霰かな
羽子板も羽根も手毬も枕べにもちきて今宵子は
ねたりけり

竹の里人

○

紅の二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨
の降る
水汲みに往來の袖のうち觸れて
散りはじめたる山吹の花
瓶にさす藤の花ぶさ短ければ疊
の上に屆かざりけり

正岡子規

若葉さす市の植木の下蔭に金魚あきなふ夏は來
にけり
病み臥せるわが枕邊に運び來る鉢の牡丹の花ゆ
れやまず
柿を守る咨き法師が庭にいでてほう〳〵いひて
鴉追ひけり
寢しづまる里のともしび皆消えて天の川白し竹
籔の上に
幾年の長き病のなぐさめに蜜柑もらひて年暮れ
んとす

荻原井泉水
俳人、名は藤吉。明治十七年東京市生。

九　五月雨の頃

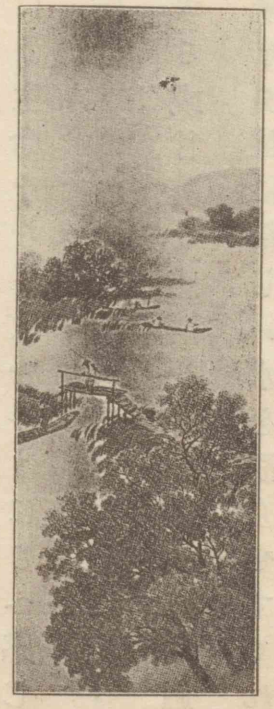
荻原井泉水

五月雨が降續く。――都會生活をするものに取つては鬱陶しい不愉快な時には生命をむしばむやうにさへ感じられるこの雨も、田園に生きるものに取つては、作物に對する希望と充足を約束する或甘美な感情をさへ與へる。過剩なほどに潤澤な雨量は、田毎に新しい水を漲らせてくれるので、容易に稻苗を植ゑることができる。そして、畑の土にも存分に養分を注入してくれるので、桑は茂り始め、胡瓜や南瓜は喜んで蔓を伸ばす。かうした頃の田園生活は、眞暗な雲に包まれながらも、生々とした感情に充ちてゐる。決

して退屈な、飽き〳〵したものではない。一日々々に青さを増して行く樹木を見ても、畑物を見ても、内から溢れ出る力が息づいてゐる。

五月雨や雲雀なくほど晴れてまた　支考

少しの晴間でも見出すと、空に駈上つて歌を歌はずにはゐられない雲雀は、少女のやうに生々としたものだ。彼等が好んで巣くうてゐる麥は、この頃はまだ青いが、霖雨があがつて、暑い日が照りつける頃になれば、まづ刈られねばならぬ。彼等は春



梅雨晴（川合玉堂筆）

支考　各務（かゞみ）氏。俳人。芭蕉の門弟。享保十六年歿、年六十八。

の名殘を惜しみながら鳴いてゐるやうである。

春の初、雲雀が空に鳴きだす頃から、地の上に美しく弱々しい影を暖い風に吹かせてゐた蝶は、五月雨頃になると、暫く隱れたやうになる。そして葉櫻の茂みの中などから、新しく小さな白い蝶が出る。それは醜い芋蟲から美しい翅を持つものへの轉生なので、それにも自然の不思議な力を思はせられるが、その幾千とも知れぬ同じ形の幼い白い生命が、一つの木を繞つてその故郷を離れかねるといふ風に、ひら〳〵と舞ひすがつてゐるのを見ると、自然の繁殖力の限ないのに驚かされる。

しかし、「産めよ、殖えよ、地に充てよ。」と言つた神の言葉は、

産めよ　舊約聖書の語。

蛙等によつて最も忠實に遵奉せられてゐる。舊い和歌では、春季のものと定められてゐる蛙は、五月雨の頃になると、寧ろ餘りに猛々しく、騷がしいものになる。この頃の田園は、到る所に水が滿ちてゐる。隨つてどこでも蛙の聲のしない處はない。彼等は「產めよ、殖えよ、地に充てよ。」といふ神の言葉をそのまゝ、彼等自身の聲にして鳴き立ててゐる。

五月雨や田舟の中に鳴く蛙

少し夕燒がして晴間を見せるかと思ふと、夜は星が出るでもなく、漆を塗りこめたやうな闇に、螺鈿を鏤めたやうな螢が、ちら〳〵と光る。梅雨期の一情趣であるが、これも叢の中のうじから美しい光への轉生である。

五月雨や江戸の俳人馬場存義の句。

秋になつて可憐な聲をして鳴くこほろぎが生まれるのも、この頃である。あの鐵のやうに黑い硬い感じのする身體とは似てもつかず、うづら色のうす斑のある柔かい透明な胴をして、細い華奢な脚をして、疊の上などに出て來る幼いこほろぎは愛らしい。それでも、觸角だけは立派に持つてゐて、新しい世界を感知するもののやうに、利口さうに振つたりしてゐるではないか。

朝早く池のほとりなどを行くと、かへつたばかりの蜻蛉が、薄絹のやうな翅をしつとりとさせ、まだ飛べないらしい弱々しい身を伏せて、大きな眼ばかりぱつちりさせてゐる。あらゆる若い生命が地上に出て、自分たちの世界の近づ

いてゐることを感じながら、今はたゞつゝましくその幼さを養つてゐる。

一〇　童謠二篇

北原白秋
詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣生。

一　雨

北原白秋

雨が降ります、雨がふる。
遊びに行きたし、傘はなし、
紅緒のかつこも緒がきれた。
雨が降ります、雨がふる。
いやでもお家で遊びませう。

千代紙折りましよ、たゝみませう。
雨が降ります、雨が降る。
けん〳〵小雉子が今啼いた。
小雉子も寒かろ、寂しかろ。
雨が降ります、雨が降る。
お人形寢かせどまだ止まぬ。
お線香花火も皆たいた。
雨が降ります、雨がふる。

晝もふる〳〵、夜もふる。
雨が降ります、雨がふる。「日本童謠選集」

二　蝸牛の唄

西條八十

西條八十　詩人。明治二十五年東京市生。

のおろり　のおろり　蝸牛
日がな一日のおぼつて
槲の木で何見た

一本目の枝で
見えたは牛の子　隣の牛の子
母さんに抱かれて藁の上

二本目の枝で
見えたは娘　むかひの娘
窓で手袋編んでゐた

三本目の枝で
見えたは海よ　白帆のかげが
あつちにもこつちにも

四本目の枝で
つひ日が暮れた

金貨のやうなお月さま
葉つぱのかげから今晩は　「童謠全集」

小川未明

小川未明　創作家。名は健作。明治十五年新潟縣生。

一一　姉の後悔

弟の年は十で、兄は丁度十三でありました。弟は、よく氣がついて、その上可愛らしうございましたから、家内の者ばかりでなく、誰にでも可愛がられました。

兄はどちらかといへば、餘り物を言はない方で、いつも獨で遊んでゐることを好みました。弟が褒められたり、からかはれたりする時でも、兄はあちらで淋しさうにして獨で遊んでゐました。

しかし、兄は決してみんなから憎まれたといふ譯ではありません。唯弟のやうに可愛がられなかつたのです。

ある日のことでありました。弟は、外から家にはひつて來ると、兄に向つて、

「兄さん、今晩螢を捕りに連れて行つておくれよ。」と賴みました。

兄は生れつき、弟のやうに目が良くありませんので、夜はあまり外へ出たがりませんでした。

「この邊には、螢がゐないだらう。遠くへ行かなければ駄目だらう。」と、兄は答へました。

「兄さん、隣の俊雄さんが、二三日前にあちらの田圃で捕つ

て來ましたよ。」と、弟はせがみました。

「ぢや、暗くなつたら行つて見ようか。」と、兄はおとなしく承知しました。

二人はどこかで切つて來た長い笹葉の附いた青竹の先に、水を濡らして螢を追駈けるのであります。

初夏の日が沈みますと、暫く空は酒に醉つたやうに色づいてゐました。田圃には、いろ〳〵の野菜や草が、柔かな芽や蔓をぐん〳〵と伸ばし、あたりがしつとりとして、何となく香ぐはしかつたのです。

弟は、兄の先になつて村を出はづれて、小さな川縁にまでやつて來ました。遠くの地平線はもう暗くなつて、田の畦

道に立つてゐる並木の影が、かすかに空に浮出てゐましたが、それも分らなくなると、あたりは全く暗くなつて、水音ばかりが聞かれたのでありました。

「兄さん、隣の俊雄さんが、此處にゐたと言つたけれど、一足もゐませんね。」と、弟は急に張合が拔けたやうに言ひました。

「まだ早いのだらう。」

兄は手に青竹を持つてゐました。二人の少年は細道を傳つて、田の間を歩いて行きました。

田には、まだ稻の葉が短くて、蛙が頻りに鳴いてゐました。

「兄さん、あれは螢ではありませんか。」と、弟は不意にあちらを指しました。

「どれ……。」と、兄は、青竹を振上げて走りました。

青光りのする大きな螢が、稻の葉の頂を掠めて、兄の先になつて飛びました。兄は、幾たび其の螢を打つたか知れません。けれど螢は巧みに避けて、やはり其の青光りのする影を、下の田の水の面に映して飛んでゐました。

「兄さん！兄さん！」と、弟は、後から兄を呼びながら走りました。

兄は星影をば、螢と思つて追駈けてゐたからです。

弟は、兄に其のことを知らせようとしたのです。けれど兄には弟の聲が聞えなかつたのでありました。そのうち弟は、兄が星を螢と思つて追駈けてゐるのが、面白くなりま

した。

何處を見ても螢の影すらなく、全く張合がなかつた時に、弟は思ひがけなく面白い事實に接したことから、こちらで手を叩いて笑つてゐました。

そして、家に歸つたらお母さんや、お父さんや、姉さん達に、兄が星を追駈けたことを話さうと思ひました。

「兄さん、捕れましたか。」と、弟は叫びました。

「いま、捕つてやるよ！」

兄はかう言つて、早く弟に螢を捕つてやらうと、やはり追駈けてゐました。そのはずみに、兄は小川の中に落ちて轉んでしまひました。

やがて、二人は家の方へ歸つて行きました。兄は體ぢゆう濡鼠のやうになつて、着物は泥に汚れてゐました。

家へ歸ると、弟はすぐに上りましたけれど、兄は入口の處に、しよんぼりとして立つてゐました。

「なぜ上らないの。」と、姉さんは言ひました。

兄は叱られると思つたのでありませう、默つてゐました。すると弟が、

「兄さんは川の中に落ちたんです。」と告げました。

「まあ。」と姉さんは驚いて、入口の方へ出ました。

そして、兄の様子を見て、二度びつくりしました。

「お前は弟より大きいぢやないか。それに御覽なさい、こんなに着物を汚して來る馬鹿がありますか。弟に對して恥づかしくありませんか。」と、言つて叱りました。

兄は、姉さんが弟を褒めて、自分は叱られてゐるのを知つても默つてゐました。――弟のために、螢を捕つてやらうとして追駈けたことも、自分が目が良くないために、田の表に映る星影の一つを螢と思つたことも、躓(つまづ)いて小川の中に陷(はま)つたことも。――

兄はおとなしく姉さんに叱られてゐました。やがて、兄と弟の二人が明るい家の中に上つて來ました。

「どうして、川の中などへ陷つたの。」

その時姉さんは、始めて笑顔をして、二人に尋ねました。

兄はやはり默つてゐましたが、弟はあつた事をすつかり姉さんに話しました。

姉さんは默つて聽いてゐましたが、そのうちに兩方の眼から涙が湧いて出て、

「螢を捕つてやらうと思つて、……さう、まあ、そして川に陷つたの？」と言つて、兄を叱つたことを後悔して、その頭を撫でてやりました。

渡瀨庄三郎　理學博士。東京帝國大學教授。東京府の人。

呼ぶ聲は　元祿時代の俳人內藤丈草の句。

一二　螢の話

渡瀨庄三郎

夏の夕方、水邊に立つて螢を見る。八時頃から段々多く出て來て、十一時頃には最も盛になるのであるが、此の時分になると、螢狩の人達は最早家に歸つて、其のあたりには影も見えない。

呼ぶ聲は絕えて螢の盛りかな

螢は始終光つて居るものではない。今まで樹に止まつて居たかと思ふと、急に飛始めて、十分間程飛廻る。すると又樹に止まつて、光も淡くなるが、十分間程たつと又飛始める。午前一時二時になると、皆樹の葉に靜かに止まつてし

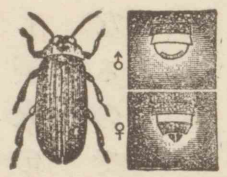
まひ、光もごく弱くなつて、僅かに認められるぐらゐになり、其のあたりは殆ど眞の闇となる。此の時、他から一匹でも光を放ちながら螢が飛んで來ると、今まで光らずに居た多くの螢が之に應じて、又一時に光を放つて、長くは續かないが、其の當座は再び近邊が明るくなるものである。是は一匹の螢が光り出すと、他のものが皆負けん氣になつて競爭するのかと思はれる。其のくせ、螢は他の物の光をば至つて嫌ふのである。是は、

明りから暗がりへ入る螢かな

と詠まれて居るのを見ても分る。それで、太陽の輝いて居る中は勿論、夜でも月のある時、殊に滿月の折などには、ぢい

明りから　天明時代の俳人高橋東工の句。

つとして居て飛歩かない。たゞ樹に止まつて、淡い光を出して居るばかりである。併し又暗夜に小さな光が見えると、必ず其の方向へ飛んで行く。例へば、螢を罎に入れて振つて見せると、其處へ飛んで來る。是は螢であるからさもあるべき筈であるが、必ずしも螢火には限らない。煙草を吸ひながら水邊に居ると、やはり其處へ飛んで來る。或時螢狩に出掛けた所が、大きな少し色の違つた光つて居るものが來るので、是は定めて新しい種類の螢ござんなれと身構をして、あはや捕蟲網を被せようとしたら、螢ではなくて、大の男が卷煙草をくゆらしながらやつて來たのであつた。同類の光を目



當に飛廻る螢でさへ間違へるぐらゐだから、吾々人間が間違へたのは已むを得ないことであらう。

多くの螢は夜の演劇を濟まして、夜明に近づくと、だんだん地に近い方へ降りて來て、

螢火の草にをさまる夜明かな

となるのである。「螢の話」

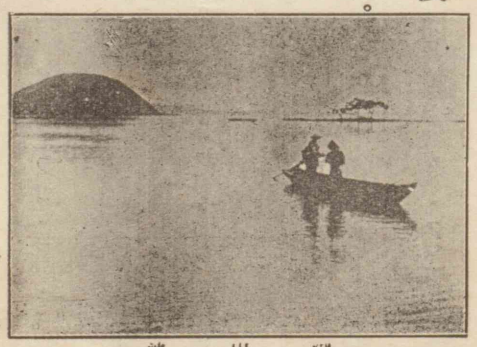
五十嵐力　文章家、文學博士。早稻田大學教授。明治七年米澤市生。

一三　湖山長者

五十嵐　力

山陰線の鳥取驛から西の方へ一里餘りも行くと、鏡のやうな大湖水がある。湖山池といつて、周回四里近くもあらう。西南の方には、丘陵や小山が波のやうに起伏して、春は

爛漫と咲いた紅白の花に彩られ、夏は滴る樹々の翠に潤され、秋は燃立つ紅葉を以て飾られる。東北の方には、田畑が廣々と連なり、砂の丘を隔てて遙かに漫漫と開いた碧の海を望むことが出來る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねた上に、湖の面には、時々、蘆荻の生茂つた間に、鷺・鷗の閑眠を貪るのが見え、又仙人めいた舟子の網を擧げて細鱗を捕るのが見える。景色の雅やかなこと、誠に一幅の名畫を展げたやうな趣がある。



湖山池

今は昔、此のあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつ

た。住家は王侯の宮殿のやうで、其の中には、金銀・財寶が積んで山を成して居た。衣るには美しい綾・錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數百人の婢僕があり、そして所有の田地は見渡すかぎり、廣々と稻の波を打つて居た。例へば、天下の富を此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中のこと何一つとして、此の長者の思ふまゝにならぬことはなかつた。

或年の夏の田植時のことである。湖山長者の家では、季節中の最上吉日を卜して、此の廣田に田植をすることとなつた。長者の家に使はれて居る者は勿論、近鄕近在の者共まで、今日こそ長者の田植だといふので、老若男女數を盡く

して身支度甲斐々々しく、我も〳〵と田圃を指して出掛けて行つた。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつゝ、己の限ない富に思はず得意の微笑を漏らして居た。

仕事は面白いやうに捗つて、早苗を取る男女の手の動く度毎に、濕つた黑い土の色が片端から靑く靑く變つて行つた。其の中に正午になつた。頓て夕暮近くなつた。仕事はめき〳〵と運んだが、名に負ふ長者が廣い土地のことであるから、植ゑるに果しなく、まだ數段を殘してある內に、日ははや西の山に入らうとした。

長者は之を見て、あゝ、今少し日が高ければ、全體めでたく

濟まうものをと暫し深い思に沈んだが、つと立つて黄金の扇を持つて來て、さつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度までさし招いた。

見る間に、山の端にかゝつた夕日は三段ばかり昇つて來た。田に立つた村人等は、天道樣をさへ左右する長者の威力を見て、如何に驚いたことであらう。かうして是までと思つた田植も、思ふまゝに捗つて、其の日も無事に暮れた。

寢覺の牛の聲が緩に響いて、夏の短い夜はやがて明けた。朝の床を起出た長者は、入日を招き返した喜と心おごりとで、眼中愈、何物もない。傲然とした態度で召使や村人を呼んで、「昨日一日で植上げた田の様子を見て來い。」と命じた。

所が、出掛けて行つて、誰一人腰を抜かすばかりに驚かぬ者はなかつた。

驚くのは無理もない。見よ、さしもに廣かつた長者の田地は迹方もなくなつて、漫々とした湖が朝の嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で終日植付けた早苗が唯の一本も見えないで、渚には群立つ蘆が波に洗はれ風に戰いで居るではないか。

長者の家は此の時から一日々々と衰へた。そして終に此の廣い田と同じ運命を以て亡びてしまつた。「趣味の傳說」

一四　水の都

高安やす子

高安やす子
歌人。醫學博士高安道成の妻。明治十六年岡山縣生。

煙の都大阪は、縱横に走る電車によつて、一層塵と雜音の交錯する巷になつた。しかし、他の都會に見られぬ特色はその川に存してゐて、夏は特にそれが大阪の生命であることを感じさせられる。まづ市を東西に貫いて海に注ぐ淀川を始め、大小縱横に通じてゐる堀や川があるので、始めて大阪の街は息づかれるやうな心地がする。その中で私が面白いと思ふのは、安治川の川口、道頓堀川の一部分、京町堀の細い流、中の島附近、本町橋のほとり、ずつと上つた淀川橋のあたりの、ちよつと隅田川の上流に似たやうな感じのする處などである。

安治川は淀川が大阪灣に注ぐ處であつて、汽船や和船が輻湊し、旅客の昇降や、荷物の揚卸しで混雜し、汽船の煙や汽笛の響でざわめいて、一種の面白い光景を呈してゐる。

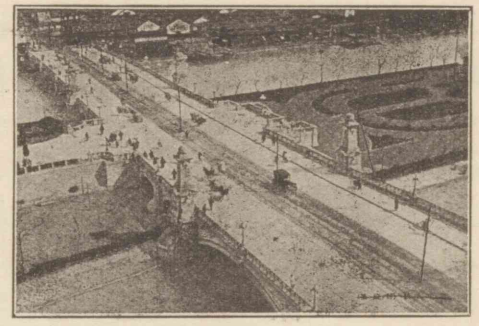
芝居街の道頓堀川を挾んで、手摺のある家の並んでゐるあたりでは、夜は特に賑やかな都會の情調を、明るい灯影が豐かに川水に漂はせてゐる。

京町堀の細い流に沿うて、古風な土藏が幾棟も建ち並んで、白壁が靜かに影を水に落してゐる處や、手拭を高い物干に染めて長く掛けてある處は、特に面白いと思ふ。

中の島は、淀川がそこで二つに別れて、島を抱いてゐる處

である。市の中央に當るので、大きい建物も多く、公園として緑の木も見える。新しい大阪とでもいふべき處である。

朝靄の中に見る難波橋も、そこに立つて見る夕映の水も、たしかに繪になると思はれる。



難波橋

本町橋の邊、商品陳列館の前の川岸には、大阪には珍しい古い大きい數株の柳が枝を垂れてゐて、夏はその葉蔭から、冬は枯枝の間から、流の向うにある家々を面白く見せてゐる。

淀川橋のあたりまで來ると、川はだん〳〵幅が廣くなり、兩側の家並も疎らになつて、いかにも淀川といふ感じを強

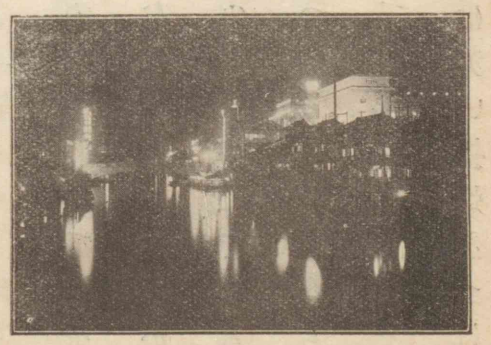
くさせられる。

夏の夜、月明の頃を選んで、私は三四の人と道頓堀川からモーター・ボートに乘つたことがある。晝間見る汚い水も、夜は灯影に美しく彩られ、家々の明るい障子には廻燈籠のやうに人影が映る。

賑やかに人の往來する幾つかの橋の下を過ぎて流を曲ると、だん〳〵灯影が少く、そして暗くなり、あたりが靜かになる。白い石の建物の前に大きい緑の木が並んでゐる處を美しいと見ると、そこは本町橋であつた。そして、間もなく明るい灯影がきら〳〵と水に映つてゐる處に出た。中の島公園附近である。澤山のボートは赤い提灯をつけて、

水の上を漕廻つてゐる。こゝから、私達と同じやうに、河上の月を見ようとして出かけるモーターボートも幾艘かある。川岸の家には、四階・五階または七階・八階と空にそゝり立つてゐるのもあつて、灯影が眩しい。

私達の舟はボートの群つてゐる中を上へ〳〵と遡つて行く。天滿橋の京阪電車停留場の下を通り過ぎると、急に暗く寂しくなつて、始めて月が空高く懸つてゐるのに氣がつく。波は月の光を千々に碎き、風は川の面を渡つて、單衣の肌も冷たい。川岸の家屋も木立も

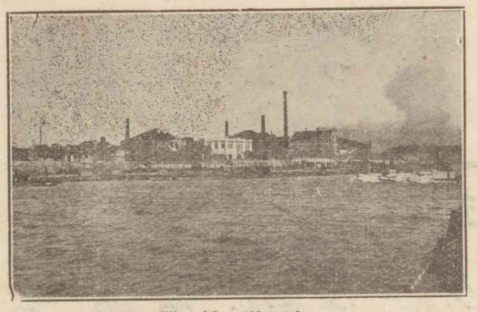


道頓堀の夜

黑く、灯影もあちらに三點、こちらに五點といつたやうに、次第に少くなる。

櫻の宮・造幣局も過ぎて、黑い長い橋の高く〳〵架つてゐるのは淀川橋である。十三夜の美しい月の光、高く黑い橋桁、濃い藍色の川水、全く廣重の筆を偲ばせる夜の景色である。橋の上でハーモニカを吹くのは誰が家の子であらう。

廣重　浮世繪師、歌川氏、號は一立齋。安政五年歿、年六十二。



淀川橋附近

私達は暫し舟を停めて、月下にその音を聞いた。こゝから毛馬（けま）の閘門はごく近いので、舟はもう上ることが出來ない。

私達は塵の都にもかうした靜かな境地のあることを珍し

く思ひ、名殘を惜しみながら、また中の島へ歸つて來た。

他の都會にはないこの多くの川筋をもつと美しくし、もつと利用して、もつと心地のよい舟を作つて、例へばヴェニスのやうに、水の都の愉快な遊を工夫したら、狹い街、塵の都の人々の魂を洗ふ料にもならうものをと、夏になると私はいつもさう思ふ。

ヴェニス　イタリヤの都市。

一五　夕立

坪内雄藏

坪内雄藏　劇作家、文學者、文學博士。號は逍遙。安政六年岐阜縣生。

風鈴も音せず、庭の木立も動かない。惡魔のやうな形をした眞黑い雲がむく〳〵と湧出して、大空をあわたゞしげに走つて居る。今まで燒くやうに照付けて居た太陽も俄

に影を隱して、天地が急に暗くなつて來た。忽ちざあつと樹々の梢が騷ぎ立つて、强風が吹卷いて來る。蟬は鳴止み、蜘蛛はちゞこまつて巢のまん中にぶらさがる。其の一瞬間ぴかりと一閃、次いでごろ〳〵二つ三つ遠く鳴つて居ると思ふ中に、銀の矢を射るやうに大粒な雨がぽつり〳〵。

乾し物を取入れる。雨戸を締める。あわてふためく人間界の大騷を、いたづら子が引つかきまはすやうに、雷は愈、鳴りしきり、ぴかりぴかり閃く電光と共に、盆を覆すやうな驟雨。乾し物は半濡、締めさしの雨戸から横に降込む。降る、鳴る、光る、吹く。こゝ暫くは天地も滅するかと思はせる。蚊帳の中に縮み

込む臆病者もあれば、網を擔いで小河に走る氣樂者もある。

雨稍小降りとなる。緣先の手拭掛、猶はた〳〵と窓を打ち、しめつた障子の紙が風の出入毎にばたり〳〵と鳴る。雷は遠くに微かに聞えて、雨は全く晴れた。窓を明けると涼しい風が心地よく吹込む。

連日の晴天に色も薄く萎れて居た草木は、此の一雨に全く生返つて、生々として見るから潔い。是で人間も蘇つた。蜘蛛は巣を繕ひ、蟬の聲は梢に聞える。表の小河はどくどくと水が一ぱい流れて居る。鮠や鮒をあさる子供の聲も元氣よく聞えて來る。天地の凡てが生返つた。

一六　富士山

金子元臣

金子元臣　國文學者。御歌所寄人、國學院大學教授。明治元年東京市生。

八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて御殿場を發す。月はいまだ足柄山の頂を離れて、三尺ばかり天に上れり。その明らかなること恰も晝の如し。

そも〳〵富士山は四面かけ拂の山にて、摺鉢を伏せたる形したれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田にありて甲斐に屬せり。山の腰より頂上までを十合に分つ。一合の距離は、路の難易によりて長短定まらず。合の界に石室を設けて、登山者の休泊所となせり。今わが登

らんとするは中畑口なり。

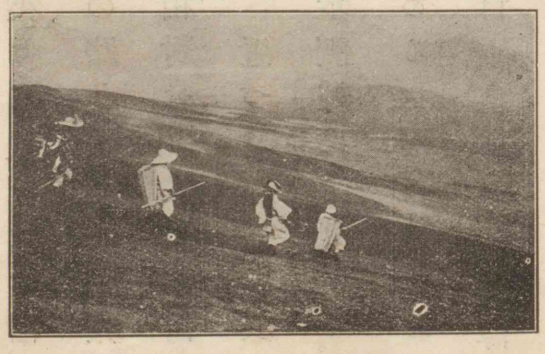
玉蜀黍や芋の葉の影の、長く短くうつれる畑道を行き過ぐれば、爪先あがりの草原なり。山百合・女郎花・撫子など咲きみだれ、露きら〳〵と光りて無數の玉を飾り、蟲の聲繁くして雨に似たり。

行くに隨ひて、はじめは仰ぎ見し足柄・箱根の連山も、愛鷹の諸峰も、次第に低くなりて、岡の如く堤の如く、はては平地の如し。只富士山のみ夜霧の奥に巍然として聳え、我を喜び迎ふるもののごとし。

風甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に立寄りて、盛に火を焚きて煖を取る。

馬返まではなほ山の麓にて、いはゆる裾野なり。こゝより先は、路嶮しければ馬も利かずとてこの名あり。いつしか・樅檜などの林の間をゆく。月影梢を洩れて鹿子斑の雪かと疑はる。

太郎坊にて金剛杖を買ふ。白木にて長さ五尺。こゝを出づれば木盡き草稀に、見渡すかぎり、コークスのやうなる燒石・燒砂なり。生物の聲全く絶えて、只わが砂を踏む足音のみ虚空に高く響く。この山、俗に「草山三里、木山三里、禿山三里」といへるが、木山の五合目まで續けるは吉田口に限り、他は大概二



砂走

三合目までなりと聞く。

一合目に到れる頃、夜は頂上より明けそめて、次第に麓の方に及べり。折々眞白なる水氣襲ひ來りて衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて須山口の路と合す。寶永山は六合目の左に峙ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち白鷺の點々として下方遙かに動くを見る。近づけば皆白衣の富士道者なり。「六根清淨」と唱へつゝ、歩調緩に上りゆく。山に醉ひたるならん、途に打倒れて苦めるを、同行の人の頻りに介抱するも見ゆ。すべて六七合目以上は空氣稀薄なれば、人の呼吸數は下界の二倍となり、火氣も亦弱くして、飯を焚くによく熟せず、糯米を加へて纔かに粘力を添ふとぞ。

八峯
劔峯・馬背嶽・雷電嶽・釋迦嶽・藥師嶽・經嶽・駒嶽・觀音嶽。

頂上を仰げば、山は殆ど落ちかゝらんばかりに聳え立ちて、一歩は一歩より嶮し。谷めきたる凹みに雪あり。潔うして碎けたる銀の如し。勇氣を鼓して掘取りてこれを嚙む。齒牙に徹りてつめたし。八合目よりはいはゆる胸突八町にて、岩石の間に路なき路を求めて上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩にて額を撲つべく、衣を裂くべし。路の窮りたる處に梯子二つかゝれり。午後一時、遂に頂上に達す。

頂上には八峯環りて立てり。劔が峯最も高し。こゝに氣象觀測所あり。八峯の中間には、周回十五六町もあらんと思はるゝ一大噴火口の迹あり。昔はこゝに水ありて、池

を成したりきとか。噴火口の外部を巡るを御鉢めぐりと稱す。その途中、北に金明水、南に銀明水の二泉ありて、盛夏も涸るゝことなし。又東に缺間ありて蒸氣を噴出す。地に手をあてて試みるに熱し。三十分にて鷄卵を蒸し、酒を燗すべし。

今や天に近づくこと一萬三千尺。杖を岩頭に立てて長く嘯けば、風起つて、雲の飛ぶこと頻りなり。足柄・箱根の山山は蟻垤の如く、山中・河口・本栖の諸湖は杯水の如し。銀の針と見ゆるは富士川か。青き絲と見ゆるは三保の松原か。駿河の海・相模の灘は二つの鏡を竝べたるが如くに光り、末は天と一つになれり。試に掌を開いて掩へば、山も水も皆

山中・河口・本栖　山梨縣に屬する。

わが手中に藏る。忽ちわが對へる空中に富士山の影現れたり。裾は山に亙り水を越えて數州をおほひ、色は紫紺にして優美鮮麗なること喩へんに物なし。これを御影と稱す。朝日には西に、夕日には東に現る。

木花開耶姫を祀れる淺間の本社を拜す。神官に乞ひて杖には烙印、扇子・葉書などには朱印を捺す。

薄暮、社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木を骨組とし、岩に倚りて石を疊みて造れり。廣さは二十疊もあるべし。あらき板敷の中央に爐を切りたり。醴酒を名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を着、蒲團二三枚重ねて寢たるが、寒氣强くして目も合はず。未明に起きて

木花開耶姫　大山祇命の女、瓊瓊杵尊の妃。

戸外に出づれば、風は錐のやうに膚を刺し、使ひ棄てたる水は片端より氷りてつらゝとなれり。乃ち立戻りて、蒲團を身に纏ひて出で、岩の上に踞して日出を待つ。

天は清く晴れたれども、脚下は薄黑き雲の波一面にはびこれり。その雲綿の如し。見る〳〵東の方ぱつとあかく、紫となり、薄紅となり、遂に深紅色となる。さて瞬く暇に朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽ちにして百千筋の金光きらきらとして八方に散じ、天地全く明らかなり。

降路は須走口を取れり。六合目より太郎坊までの間、砂の上を滑走して下るを走と稱す。一度躍れば杖も足も止る所を知らず。只風の耳朶に觸るゝ聲を聞くのみ。この間に草鞋を破ること四足。木山を過ぎ裾野を通りて、須走に着きたるは二十五日の午前九時なり。登るには十餘時間を費しゝもの、降るには僅に二三時間。快なること甚し。

裾野の月、頂上の日出、御影、これを富士山の三大壯觀とす。我はいま一擧してこれを併せ見ることを得たり。富士の山神の我を愛して、この稀なる幸を與へ給ひしにやあらん。

北原白秋　詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣生。

一七　詩二章

一　海邊の虹

虹が立つた、虹が、
お午の虹が。

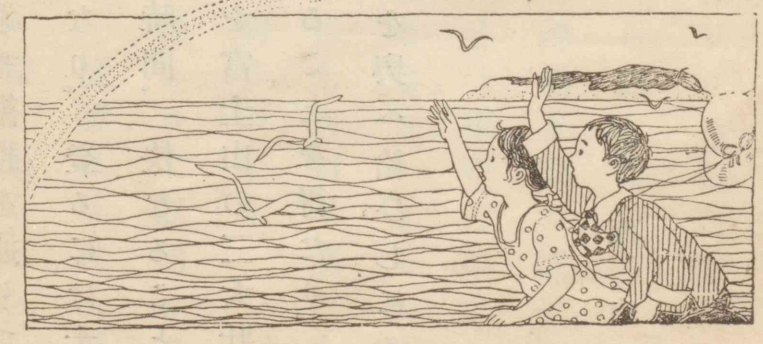
北原白秋

おや、つい、そこに、
その波際に。

紅の輪の脚よ、
綺麗な雨よ。

くゞろとすれば、
とらうとすれば。

虹の輪遠い、



だん〳〵逃げる。
追つかけて走ろ。
なほ〳〵遠い。

鷗も追へよ、
虹が沖へ逃げる。

あれ〳〵迅い。
もう海の涯だ。

遠い〳〵虹よ。
高い〳〵虹よ。「叡智ニ感覺」

加藤介春

加藤介春
詩人。名は壽太郎。明治十八年福岡縣生

二　松露の歌

うつくしい砂原を散歩する人々よ、
どうぞしづかに歩いて下さい。
うつくしい砂のなかには松露が生え、
すや〳〵と眠つてゐます。
そのちひさいあたまの上を踏まないでください。
それは地上に生れた不思議な貝の一種で、

貝のやうに砂を掘り、
砂の下にかくれてゐます。
すぐ傍らが深い海であるから、
魚の卵があがつて來て、
生えたのかも知れない、——
それは砂中の祕密です。
それは不思議な生きものです。
夜砂原の白い月がふけると、
砂中にうごきはじめます。
砂の中から可愛いあたまをもたげます。

どうぞ靜かに歩いてください。
それは非常に臆病な植物で、
泡のやうなものです、
踏まれたらすぐ消えうせてしまひます。「日本詩集」

北原白秋

一八　汽車

北原白秋
詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣生。

私の處の男の子は、數へ年のまだ三歳であるが、この子が汽車を崇拜することは全く絶對的と言つてよい。汽車は父よりも母よりも偉いと思つてゐるのだから。

考へると、汽車は常に子供の憧憬物になつてゐる。文明的で、しかも冒險的な大英雄のやうに、私も幼時は驚かされてゐた。少くとも八力以上の何物かであるやうに見えた。あの眞黑い怪物が大きな二つの眼玉を輝かして、轟々と黑い煙を吐きながら驀進して來るのを見ると、私達子供は全く胸がわく〳〵した。

うちの子は、その初は汽車と電車との區別すらつかなかつたやうだつたが、二三度上京してゐるうちに、すつかり汽車の進行のリズムまで耳にとめてしまつた。無論機關車や貨物列車の見分ぐらゐはとうの以前に知つてしまつてゐた。で、バルコンから斜丘の下を行く汽車の音を聞き、藪越しに息して行く白い湯煙を見るや否や、それこそ氣違の

やうに騒ぎ立てるのである。

「停チャ場へ行かう、停チャ場へ行かう。」

日に三四度は泣喚くので、仕方なしに時たまは下のガードまで女中がおぶつて出る。歸りには反りかへつてどうにも手にをへないので、どうかすると驛まで行つて、日が暮れてから電車で歸つて來ることがある。山の上の生活は、其の子の父母には如何にも閑寂であるが、生長力の旺盛な此の幼兒には、とても堪へられないにちがひない。

大人たちからの土産も、此の子には汽車が最も喜ばれる。赤や青やの大小數限りもない汽車が、かうして喜ばれると片端から又ぶち壞されてゆく。繪本も、汽車や電車や自動

車のついた物に限られてゐる。鼠の娘が紅い襷をして餅を搗いてゐる畫や、目鼻のある紅い太陽が、にこ〳〵笑つてゐるのなどは、少しも喜ばれない。

さて、この子は、夜の枕元にもこれらの汽車の玩具を寢かして、自分も寢なければ承知しない。寢言にまで「パン〳〵。サンドウイッチ。」と叫び出す。朝は早くから家の前の小椅子に腰をかけて、その父のやうに新聞の配達を待つてゐる。來ると、直ぐに汽車の寫眞を探す。無ければ廣告の自動車の畫で、とにかく滿足する。三歳の子から待たれる朝朝の東京の新聞は、何といふすばらしい新鮮な訪客であらう。

汽車の畫を探すばかりでなく、此の頃は自分で汽車を製造して見る興味に、心が一ぱいになつてゐるやうである。マッチの函を一列に並べる。敷島や朝日の袋を二十も三十も續けて、それを平行線に兩手で押して進行させる。朝日はごた〳〵した色で、貨物列車にさせられるが、敷島は裏を向けると、赤い圓いマークが揃つて、しかも單純でよいから、客車となる。

パヽも汽車に乘んのの、

マヽも汽車に乘んのの、

ねえやも汽車にのんの、

坊やものんの、

ゴウニュウ　牛乳のなまり。

日光・コドモノクニ・幼年の友・赤い鳥　すべて雜誌の名。その中日光は作者主宰の詩歌雜誌。

みんな〳〵〳〵のんの。

ひとりで歌つてゐる。默つて聽いてゐると、

パン〳〵、サンドウイッチ、

ゴウニュウ、

ペンタウ、

アイスクリーム、

日光・コドモノクニ・幼年の友、

赤い鳥はむづかしい。

煙草にマッチ、

やあ、ガッタン顚覆。

と言つて、片つ端からひつくり返して了ふ。時とすると

パヽの先生のゴウニュウ、

マヽの奥様のパン〳〵、

坊やの車掌おねんね。

で、汽車もねんねして了ふ。

それが愈昂じて來ると、父のデスクの上に椅子から匍上つて、この子供の國の巨人が手當りまかせに、書棚の本を取出すと、早速の汽車の創造が始まる。機關車はいつも部厚な英和辭典である。客車には黄や赤の詩集類が常に選ばれて、宮廷列車のやうにきら〳〵しい。貨物列車は、大がい學究的の書籍や全集物である。これは裝幀が同一で、重厚であるから。それが辭典機關車を先頭にして、後から徐々

に押されて進んで行つて、デスクの角へ行つて片つ端から墜落すると、「ばんざあい。」となるのである。

「季節の窓」

一九　夏休

幸田露伴

幸田露伴
文學者。文學博士。名は成行。慶應三年東京市生。

樂しき夏休は來れり。行李の紐はすでにしめて、俥だに來らば今にも家に歸り得るほどに用意整ひし人もあらん。樂しきは夏休にこそ。君が父母は指折りて待ち給はん。君が兄弟・姉妹は日を數へて待ち居りなん。君が今日の樂は、今年の樂の大いなるものの一つなるべし。

歸れ。飛ぶが如くに歸れ。野越え、山越え、はた海を越えて歸れ。歸りて父母の家に心緩やかにして夏を過せ。休

むがための夏休なれば、心おちつけて大いに休み、さて來ん秋の九月に入りて、勵み勉むる精力を蓄ふるぞよき。

「夏」といふ語は「成立つ」の約にて、稻をはじめ種々の良穀、皆この時に當り成長繁茂し、根を張り幹を伸べて、やがての開花結實の因を爲すをもて、しか呼ぶとぞ。この頃南風快く吹き、烈日盛に照らして、天地の間生氣横溢す。されば千草萬木皆各、勢づきて榮え誇るのみならず、鳥の聲は曉に勇み、蟲の翅は夕にきほひ、魚も溯り躍れば、貝も繁殖す。人も春よりこの季にわたりては、面の色も冴え、身の力も張り鍛錬を加ふれば肉體は發達し易き傾あり。思へば夏の天

幸田露伴

地はまことに壯快なり。梢をわたる旦の風、空に峙つ雲の峰、さては天の鼓のとゞろき巡りて、雷雨の沛然として到るなど、いづれかをかしからざらん。

緑蔭に書を讀めば、翠光と詩趣と共に胸にしみ、小樓に箏を彈きやめば、檐の風鈴も清き音を和す。いと暑くて苦しき日も、一庭の穢を掃つて、打水に夕の涼しさを招き、浴後を團扇片手にそゞろあるきしたるなど、その樂しさは、冬はもとより、秋にもはた味はふべからざるものあらん。よろづの家具ども、亂りがはしからず取片づけ、ふすま、障子開放ち、さては廂まはり緣側など清らに掃ひ拭き、汚れぬ衣被て、煩はしからぬ心持ちたらんには、夏はまことに好き時節なる

べし。熱し、苦しとのみ口癖にいひて、我が務を怠り、或は晝寢に身を倦ませ、朝寢に心を荒ませては、夏ほど苦しき時はなかるべし。

休み慰めんがための夏休なれども、意味なき怠に、快からぬ長き日を暮さんは惜しむべし。夏季休暇の四十日、またこれ君が生涯の一部ならずや。

二〇　太平洋の落日

水谷まさる

汽船は今しも太平洋の上を走つてゐる。わたしは通風筒の蔭に椅子を据ゑて、それに腰をかけて浪を見てゐる。浪の寄せて來る繰返しのなかに、私は色んな幻を見てゐる。

水谷まさる
詩人。本名勝。明治二十七年東京市生、

次から次へと浪は幻を生む。そしてぱつと白い波頭が碎けると幻は消える。みんな日本に殘つてゐる人たちの顏だ。遠く離れたなと、わたしは思ふ。

南をさしてだいぶ來たから、この夕暮は快活である。風も氣輕である。わたしのネクタイは、ともすれば首に卷きつく。帆綱は口笛を吹いてゐる。ほがらかなたはむれ心で――なんだか心が輕い。海なんてこはくない。汽船はちつとも搖れはしない。ぐん〳〵走つてゐる。エンヂンの音はをどる心臟である。この汽船は愉快な若者だ。

もう三晩も寢たら、常夏の島ハワイだな。くすんだ合服のズボンをぬいで、さつぱりとした白のズボンと、白の靴を

穿かう。そして、心のなかに勢のいゝ、噴水を仕掛けよう。

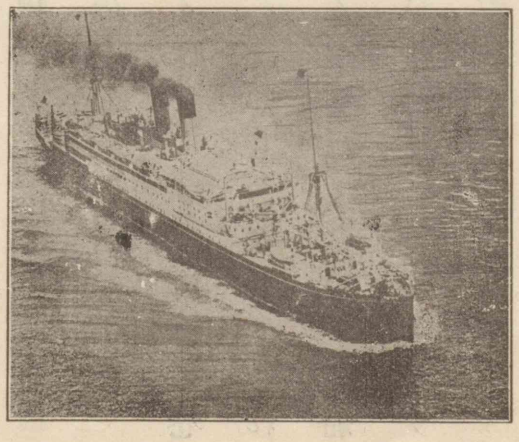
淋しさや、悲なんか、ほとばしる心の噴水と一緒に、空で散つてしまふがいゝ。わたしは仔馬のやうに、なんにも考へまい。

そして、常夏の國ハワイの海岸の白砂を、さわやかに踏まう。

ところで、今はすつきりした夕暮。さわやかな初夏の感じだ。

かつて地圖で見た太平洋が、こんな海とは知らなかつた。わたしは仕合だ。

その後であつた。わたしは、夕燒雲の美しい或夕暮のこ



太平洋航行中の汽船

とを忘れることができない。そして、その夕燒雲が、美しかつただけに、わたしの胸は痛んだ。

東も西も水ばかり
南も北も水ばかり
太平洋のまんなかで
汽船のうへからふとも見た
夕燒雲がわすられぬ。
いつでもあんなうつくしい
夕燒雲があるんだろ。
けれど誰にも見られずに
さびしく消えて行くんだろ。

東も西も水ばかり
南も北も水ばかり
太平洋のまんなかの
さびしいけれどうつくしい
夕燒雲がわすられぬ。

それは、沈みゆく太陽の、ほしいまゝな美の溢れであつた。紅く染め出した雲。雲と雲との間の匂はしい空。はた、雲の端に光る金の條。そして、厚い雲の下の靜かな紫。

海は浪を揚げて、夕暮を溶かさうとしてゐた。西へはるかな紅が流れ、空と水とうち浸るあたり、光の金の蛇が、きらきらとをどつてゐた。

わたしの心は、思ひがけぬ美しさに、すつかりうたれてしまつた。汽船の甲板に立つて、手すりにつかまつてゐる手は、歡びにふるへた。だが、あまりにも、壯麗なものを見る時、心の痛まぬ人があらうか。

わたしの心は痛んだ。わたしの觀望は、まばゆかつた。

わたしの胸には、溜息が充ちた。この美しさをまともに眺め得るだけのよき感覺を、わたしが持たぬのを恐れた。

それにしても、このほしいまゝな、美の溢れのもつたいなさ。神は人の目を豫期することなしに、いつもかゝる夕燒を、この太平洋のまんなかにお示しなさつてゐるのだ。

「遠き幻」

名人團平　義太夫節の三味線彈、明治三十一年歿、年七十二。
鈴木鼓村　音樂家。現名那智俊宣。京都の人。

二一　名人團平

鈴木鼓村

「御免なさりませ、團平の御師匠さんはこちらで。」と、海松布のやうな着物を着た乞食が、或日初代豐澤團平が住居の格子先へ立つた。

「お何や。どなたかいらつしやつたやうだ、行つて御覽。」と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。

「へい〳〵。」と、紀州出の女中は、濡れた手を前垂で拭きながら玄關に出た。さうして、右の手で襷を外しながら、敷居際に手をついて、障子をあけて來訪の客を見上げた。

「ちよつと、その何でござります、お師匠樣にお目通を、へい。」と、蓬頭垢面の物乞は、揉手をしながら小腰を屈めた。

「あらつ。お前お貰ひぢやないか。おかみさん、お貰ひの癖に旦那さんに……まあどうでせう。」

女中は頓狂に叫んだ。

「何です、騷々しい。どうしたといふの。」と、女中の仰山な聲に釣られて女房も出て見た。

「このやうな服裝を致しまして、誠にはや何でござりますが、どうぞ一生のお願ひでござりまするで……へい、お師匠樣にちよつと。」

「そんなことは出來ません。早く往つて下さい。それに

何用か知らないが、お師匠様もお留守です。さつさと往つて下さい。」と女房は面を顰めた。

「そこをどうか一生のお願ひでござりまするで。」と、乞食は執拗く動きさうもない。

「何だ、騒々しい。」と、主人の團平は襖から身體半分を出して玄關を見た。

「あなた、まあどうでせう。お師匠様にお目にかゝりたいなんてほんとに厭なお貰ひですこと。」と、女房の聲には角があつた。

「なに、お客様か。」と、團平はやをら玄關口に出ようとした。

「およしなさい、お貰ひですよ。」と、女房は良人の袖を控へた。

「なに、ちよつとお目にかゝりさへすれば、最早此の世に望もございませんで、へい。」と、格子先の聲には潤みがあつた。

「一生のお願ひでは、あ。」と、團平は溜まらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生のお願ひでござりまする。」

團平はつと進んでその海松布のやうな着物の珍客を見た。さうして慌てたやうに「これはようこそ御尊來。さあさあどうぞ。」と、自分で格子を開けて、

「こらつ、何をぐづ〳〵してゐるんだ。お洗足でも持つて來んか。」と、女共を叱つた。そして、今更のやうに恐縮がる

乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女共は唯呆れて物もいひ得なかつた。

「むさい風體で、誠にどうも相濟みませぬわけで、へい。」と、乞食は座に得堪へぬらしくもじ〳〵してゐる。

「いや、どう致しまして。して御用は……。」と、團平は賓客への禮を崩さなかつた。

「實はその、突然の儀にござりまするが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好でござりまして、しかしまだその、何でござりまする、お師匠のを伺つたことがござりませぬで、それをば一生の願とはして居りましても、御覽のやうな、はや見る影もない態で、何ともどうも……。」と、きれ〳〵の言葉に境遇を恥ぢる素振は現れて居るが、其の熱心の態度は眼の輝きにも知られて、さすが古今の妙手の心を動かすに十分であつた。

「さうですか、それはまあようこそ。よろしい、彈きませう。どうぞゆつくり聽いて下さい。おい、お茶とお菓子、それからお煙草盆はどうした。いやどうも失禮な奴ばかりで。」と名人團平は次の間に立つて、三味線を抱へて來た。

「誠にはや有難いことでござりまして。」と、乞食は感に堪へて居る。

調律の撥音にさへ、浪花の街の動搖は靜まつて、秋の午下りは夜半のやうだ。彈出したは、「志度寺のお辻の最期。」そ

志度寺
民谷坊太郎復讐の傳說を脚色した「花上野櫻の石碑」

の水際立つた絃の音には、富貴もなく貧賤もなく、人もなく我もなく、三味線もなく撥もなく、唯鳴りに鳴る玄妙の音ばかり。乞食の頰には涙が滂沱と傳はつた。

乞食は欣然として、辭し去つて行く處を知らなかつた。それを飽かず〳〵見送つた團平の眼には潤みがあつた。その名人の眼の潤みこそ、知己に遇つた歡喜と、二度と會はれぬ別離の悲とを語るものであつた。やがて室に歸つた團平は、藝人の妻としての不心得を責めて、離緣を申し渡したが、同輩・門弟等の詫で漸く納まつたといふことである。其の名人、今は天に歸つて、不思議の音締はもう耳にすることが出來ぬ。

といふ淨瑠璃曲の一節。

松村武雄
文學者、神話學者。文學博士。東京帝國大學講師。明治十八年熊本市生。

噫、音樂の天才、天才の技倆は人と共に亡びてしまふ。然しこの美はしい譚は永久に生命をもつであらう。「耳の趣味」

二二　兒獅子の自覺

松村武雄

兒獅子が、或日母獅子の眠つてゐる間に森の中でたゞひとり遊び戯れてゐた。彼はいろ〳〵變つたものに氣を引かれて、一寸探檢を試みて、自分の家から離れた大世界は、どのやうなものかを見たいと思つた。しかしあまり遠くまで出歩いたので、とう〳〵路を見失つて、迷兒になつてしまつた。

兒獅子は驚いて氣も狂はしく、八方に走り廻つた。そし

て悲鳴を擧げて母を呼んだが、母は答へなかつた。疲れ果てて、どうしていゝか分らなくなつた時、近頃兒を失つた一頭の羊が通りかゝつた。羊は兒獅子の憫れな啼聲を聞きつけて、その側に歩み寄つて來た。そしてやさしく世話をした上、遂に養子として引取つた。

羊は此の迷兒を可愛がつて育ててゐたが、間もなくそれが自分よりも大きくなつたので、時には何だか怖いやうな氣がして來た。彼の眼の底には羊の了解しかねる不思議な光さへ見えることが度々であつた。

當分の間は、養母も養子も共に幸福な月日を送つてゐたが、或日向うの山の頂に大きな一頭の獅子が勇姿を現して、

ふさ〳〵とした鬣を打振つて、谿間に鳴り響く唸り聲を擧げた。母の羊は恐れて立ちすくんだ。しかし兒獅子は此の不思議な聲を聞くと、魔力にかゝつたやうにぢつと耳を澄ました。今までに覺えのない奇妙な感じに搖り動かされて體中がわく〳〵した。

獅子の唸り聲は兒獅子の胸の琴線に觸れて、これまで感じたことの無い新しい力を喚び起したのであつた。此の不思議な力こそは、彼に靈覺を與へる新生の力であつた。彼は無意識に唸り返した。さうして向うの山の獅子を目當に飛び去つた。

羊と思つて、犬にも狼にも震へてゐた彼に、獅子としての

自覺が起つた時、彼の中から全く新しい力が湧き上つた。獅子の生涯が始まり、獅子の自由、獅子の威力、獅子の山野が彼のものとなつた。

兒獅子と羊

我等のうちにも眠れる獅子の性格がある。唯問題は如何にして之を呼び醒ますかである。人間の中には人間ならぬ貴いものが眠つてゐる。特別の事變が、特別の靈感が、その人間ならぬものを搖り動かす時、そこに驚くべき神性が現れて來る。羊と思つたものは驚く。奇蹟といふ。しかし、それは潛在せる

神性が、神性としての自由を發揮したに過ぎない。

（マーデンの「如何にして希望を達すべきか」より）

マーデン　米國の實業家、「成功」の主筆。

夏目漱石　小說家、英文學者。名は金之助。東京の人。大正五年歿、年五十。

二三　母の面影

夏目漱石

私は母の記念の爲に此處で何か書いて置きたいと思ふが、生憎私の知つてゐる母は、私の頭に大した材料を遺して行つてくれなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此の千枝といふ言葉を懷かしいものの一つに數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母だけの名前で、決して外の女の名前であつてはならないやうな氣がする。幸に私はまだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼起す彼女の幻像は、記憶の絲をいくら辿つて行つても、お婆さんに見える。晩年に生れた私には母のみづ〳〵しい姿を覺えてゐる特權が遂に與へられずにしまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其の眼鏡は鐵緣の古風なもので、球の大きさが直徑二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けた儘、少し頤を襟元へ引附けながら、私をぢつと見る事が屢、あつたが、老眼の性質を知らない其の頃の私には、それが唯彼女の癖とのみ考へられた。私は此の眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の襖を想ひ出す。古びた張交ぜの中に、生死事大・無常迅速云々と書いた石摺なども鮮かに眼に浮かんで來る。

夏になると母は始終紺無地の絽の帷子を着て、幅の狹い黑繻子の帶を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に殘つてゐる母の姿は、何時でも此の眞夏の服裝で頭の中に現れるだけなので、それから紺無地の絽の着物と幅の狹い黑繻子の帶を取除くと、後に殘るものはたゞ彼女の顏ばかりになる。母がかつて緣端へ出て、兄と碁を打つてゐる樣子などは、彼等二人を組合せた圖柄として、私の胸に收めてゐる唯一の記念なのだが、其處でも彼女はやはり同じ帷子を着

て同じ帶を締めて坐つてゐるのである。

私はついぞ母の里へ連れて行かれた覺がないので、長い間母が何處から嫁に來たのか知らずに暮してゐた。自分から求めて訊きたがるやうな好奇心は更になかつた。それで其の點もやはりぼんやり霞んで見えるより外に仕方がないのだが、母が四谷大番町で生れたといふ話だけは確に聞いてゐた。宅は質屋であつたらしい。藏の幾戸前とかあつたのだと、かつて人から敎へられたやうにも思ふが、何しろ其の大番町といふ所を、此の年になるまでいまだに通つた事のない私のことだから、そんな細かな點はまるで忘れてしまつた。

たとひそれが事實であつたにせよ、私の今もつてゐる母の記念のなかに、藏屋敷などは決して現れて來ないのである。大方其の頃にも潰れてしまつたのだらう。

母が父の所へ嫁に來るまで御殿奉公をしてゐたといふ話もおぼろ氣に覺えてゐるが、何處の大名の屋敷へあがつて、何の位永く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質さへよく辨へない今の私には、たゞ淡い薫を殘して消えた香のやうなもので、殆ど取留めやうのない事實である。

しかしさう云へば、私は錦繪に描いた御殿女中の羽織つてゐるやうな華美な總模樣の着物を宅の藏の中で見た事がある。紅絹裏を附けた其の着物の表には、櫻だか梅だか

が一面に染め出されて、處々に金絲や銀絲の刺繍も交つてゐた。これは恐らく當時の裲襠（うらかけ）とかいふものなのだらう。しかし母がそれを打掛けた姿は、今想像してもまるで眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けたお婆さんであつたから。それのみか私は此の美しい裲襠が其の後小搔卷に仕立て直されて、其の頃宅に出來た病人の上に載せられたのを見た位だから。

私が大學で教はつたある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別を贈らうと思つて、宅の藏から高蒔繪に緋の房の附いた美しい文筥を取り出して來た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰ひ受けた時の私は、全く何の氣も附かなかつたが、今斯うして筆を執つて見ると、その文筥も小搔卷に仕立て直された紅絹裏の裲襠同樣に、若い時分の母の面影を濃かに宿してゐるやうに思はれてならない。母は生涯父から着物を拵へて貰つた事がないといふ話だが、果して拵へて貰はないでも濟む位な支度をして來たものだらうか。私の心に映るあの紺無地の紹の帷子も、幅の狹い黑繻子の帶も、やはり嫁に來た時から既に箪笥の中にあつたものなのだらうか。私は再び母に會つて、萬事を悉く口づから訊いて見たい。

惡戲で强情な私は、決して世間の末つ子のやうに母から甘く取扱はれなかつた。それでも家中で一番私をかはゆ

がつてくれたものは母だといふ強い親の心が、母に對する私の記憶の中には何時でも籠つてゐる。愛憎を別にして考へて見ても、母はたしかに品位のある床しい婦人に違なかつた。さうして父よりは賢さうに誰の目にも見えた。氣むづかしい兄も、母だけには畏敬の念を抱いてゐた。

「御母さんは何も言はないけれども、何處かに怖いところがある。」

私は母を評した兄の此の言葉を、暗い遠くの方から明らかに引張り出して來る事が今でも出來る。しかしそれは水に融けて流れかゝつた字體を、きつとなつてやつと元の形に返したやうな、際どい私の記憶の斷片に過ぎない。其の外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。

途切れ〳〵に殘つてゐる彼女の面影をいくら丹念に拾ひ集めても、母の全體はとても髣髴する譯に行かない。其の途切れ〳〵に殘つてゐる昔さへ、半以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは摑めない。

或時私は二階へあがつて、たつた一人で、晝寢をした事がある。其の頃の私は晝寢をすると、よく變なものに襲はれがちであつた。私は何時、何處で犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金錢を多額に費消してしまつた。それを何の目的で何に使つたのか其の邊も明瞭でないけれども、子供の私には到底償ふ譯に行かないので、氣の狹い

私は、寢ながら大變苦しみ出した。さうしてしまひに大きな聲を揚げて、下にゐる母を呼んだのである。

二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事の出來ない、生死事大・無常迅速云々と書いた石摺の張交ぜにしてある襖のすぐ後に附いてゐるので、母は私の聲を聞き附けると、すぐ二階へあがつて來てくれた。私は其處に立つて私を眺めてゐる母に、私の苦しみを話して、「どうかして下さい。」と賴んだ。母は其の時微笑しながら、「心配しないでも好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから。」と言つてくれた。私は大變嬉しかつた。それで安心してまたすやすや寢てしまつた。

八波則吉
國文學者。第五高等學校教授。

私は此の出來事が、全部夢なのか、又は半分だけ本當なのか、今でも疑つてゐる。しかしどうしても私は實際大きな聲を出して母に救を求め、母は又實際の姿を現して、私に慰藉の言葉を與へてくれたとしか考へられない。さうして其の時母の服裝は、いつも私の眼に映る通り、やはり、紺無地の絽の帷子に幅の狹い黑繻子の帶だつたのである。

「漱石全集」

二四　希望

八波則吉

北風荒れて白雪は、
野山を深くとざせども、

雪の下には下もえて、
千草八千草春を待つ。

黑雲空にみなぎりて
しのつく雨の降らば降れ。
雲の上にはにこやかに
太陽あるを思はずや。

なほこの上にうきことの
積れといひし人もあり。
艱難われにせまるとも、

なほこの上にうきことのなほこの上に積れかし限りある身の力ためさん。
（熊澤蕃山）

などか眉根をわれ寄せん。
學の力身にそへて、
希望の光かゞやかせ。
遂に消えざる雪はなく、
遂に晴れざる雨はなし。

二五　漸進主義

八波則吉

昔顧愷之といふ人は、甘蔗を食ふ毎に、常に尾から本に至るのでした。或人がその理由を問ふと、愷之は「漸く佳境に入る。」と答へたと晉書といふ書に見えてゐます。私のこ

八波則吉　國文學者。第五高等學校教授。
顧愷之　支那晉代の學者。
晉書　支那晉の時代の歴史。

ここにいふ漸進主義とは、卽ちこの漸入佳境主義のことです。

「漸」の一字、これ私が平素最も愛する文字です。「やゝ」、「やゝ」、「やうやう」、「やうやく」などと訓じまして、次第々々の義です。急の反對です。一歩々々の意味です。一足飛ではなくて、一足づゝの意味です。漸進、々々。これ私が平素最も愛する主義です。

戊申詔書の中に、「自彊息マサルヘシ。」とあります。それは周易といふ書にある「天行は健、君子は以て自ら彊めて息まず。」と同義だと承つてゐます。卽ち日月星辰の運行は、幾萬年の往古から幾億歲の未來まで、自彊不息です。しかも一定の速度を以て、一定の軌道を漸進してゐるのです。

周易　支那古代周の時に作られた書。

御覽なさい、太陽は朝に出て夕に沒すること、昨日も今日も同樣です。千古不易です。試みに日向に棒を立てて日影の推移を熟視すると、少しも動いてゐるやうには見えませんが、暫時油斷してゐる間に、驚くばかり移つてゐます。東北地方で、農夫が夏時田の畔や草原に寢てゐるが、竿に蓑笠を吊して枕元に立てながら、身はその蔭を離れる尺餘の炎天下に熟睡してゐるのを往々見受けると、或旅行記に記してありましたが、よく天行の健を示すと同時に、君子でないものの自彊不息實行難を物語つてゐるではありませんか。

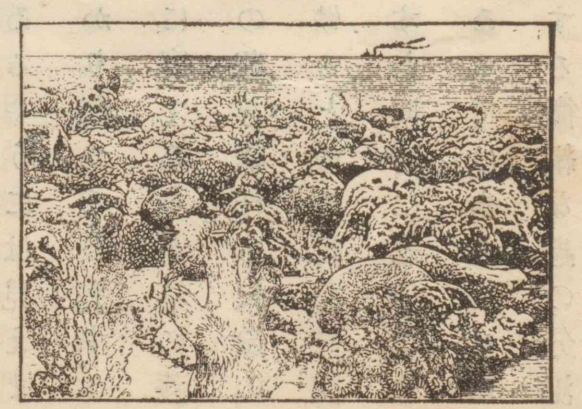
南洋にある珊瑚礁は、珊瑚蟲と稱する微細な蟲の分泌する石灰質の堆積ださうです。蟻の塔や蜜蜂の蜜などを見

る毎に、私は自彊息まない漸進主義の效果の大きいのに驚かないではゐられません。

昔愚公が山を移したといふ話が列子といふ書に出てゐて、駿臺雜話にも引いてあります。又鐵の杵を磨いて針を造るものを見て學に志した人の話は、よく人口に膾炙してゐます。いづれも根氣よく辛抱すべきことを諭した自彊不息の實例で、取りも直さず漸進主義の效果を語つてゐるのであります。

列子　支那の思想家列禦寇の學說を述べた書。

駿臺雜話　德川吉宗時代の學者室鳩巢の隨筆。



珊瑚礁

明治天皇の御製の中の、

いちはやく進まんよりも怠るな
まなびの道にたてるわらはべ

とる棹の心長くも漕ぎよせん
蘆間の小舟さはりありとも

大空にそびえて見ゆる高嶺にも
のぼればのぼる道はありけり

など、いづれも漸進主義、卽ち息まない自彊の偉績を敎へ給うたものかと拜察します。古今集の序に、

「遠き所も出立つ足もとより始まりて、年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢより成りて、天雲たなびくまでおひのぼ

れる如くに……。」

とあるのも、古歌に、

怠らず行かば千里のはても見ん
うしの歩のよしおそくとも

とあるのも、またわが漸進主義を説明し、鼓吹したものと見ればみられます。「よくぞ男に」

三浦梅園
學者。名は晋、字は安貞。豐後の藩士。寛政元年歿、年六十七。

二六　學藝

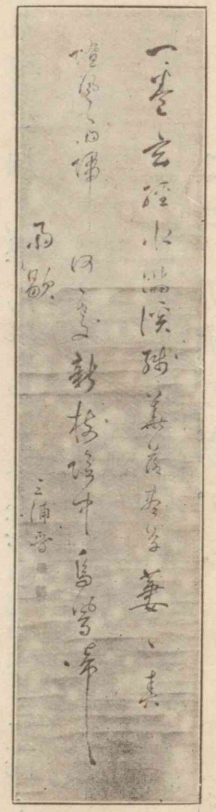
三浦梅園

今の人、或は學に志し、或は藝に志す者、一旦憤を起し、晝夜を分たず勉め勵むと雖も、已に一月を經、半月を過ぎ、怠る心早く生じ、吾がつとめいたらずとは言はで性質の過に諉す。

李白
支那唐代の詩人。

匡山
支那四川省にある山。

馬は速しとて、朝暫く走りて止まんに、いかでか牛の終日ありかんに及ぶべき。谷間の石のみがけ、井桁の圓くなるも、豈一朝一夕の力ならんや。



三浦梅園筆蹟

今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、而うして後その驗あり。人一生の力をその道に用ふるさへ、なほその奥義に至るは易からず。況や我が一月・半月乃至一年・半年のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす、思はざるの甚だしきなり。

昔李白書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、道にして老人の石に當てて斧を磨るに逢ふ。これを問へば、「針とな

すべしとてすりき。」といひけるに感じて、勤めて書を讀み、終にその名をなせり。小野道風は本朝名譽の能書なり。

小野道風　平安朝中期の人。三蹟の一人。

若かりし時、手を學べども進まざる事をいとひ、後園に立休らひけるに、蛙の泉水のほとりの枝垂れたる柳に、飛上らんとしけれども、屈かざりけるが、次第々々に高くとんで、後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より藝の勉むるにある事を知り、學んでやまず、其の名今に高くなりぬ。

「梅園叢書」

二七　初秋の窓から

相馬御風

相馬御風　文學者。名は昌治。明治十六年新潟縣生。

わが待ちし秋は來ぬらしこのゆふべ草むらごとに蟲の聲する

良寛　詩歌と奇行で知られた僧。越後の人。天保二年歿、年七十四。

これは良寛和尚の歌である。一見平凡のやうで、しかもしみ〴〵と胸に沁入る力を持つた歌である。ふと蟲の音に心をとめた刹那の心の動きが「このゆふべ」の一句でぴたりと捉へられてゐる。今までぼんやりして氣づかずにゐたが、今晩ふと心をとめて聽くと、どこの草叢からも蟲の聲がきこえる。その蟲の音を聽くと、いよ〳〵自分の待つてゐた秋が來たらしく感じられる——一首の大意はそれほどのところであらうが、それだけのさらりとした表現のうちに、秋を待ち得た歡も、更に自然の推移に對する驚といつたやうな心持さへも感じられる。

この歌について思出されるのはかの有名な、

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ
おどろかれぬる

といふ古歌である。二首とも音によつて初めて「秋」を感じてゐる點で相通じてゐるのは面白い。「秋は蟲の聲より」――かう他の一人は感じた。「秋は風の音より」――かう他の一人は感じた。そこが一種の興味をそゝる。

これらの名歌と比べようといふのではないが、私は嘗てこんな歌を詠んだことがある。

秋來ぬと
古今集、藤原
敏行の歌。

わが吹きし煙草の煙の行末を今朝しみ〴〵と眺めたりけり

毎朝起きたての茶の間の爐傍に安座して、心靜かに一二本の煙草を燻らすことが、この數年の私の大きな樂の一つである。その朝も私はいつもの通りにそれをやつた。ところが、どういふはずみであつたか、その朝に限つて私の視線が不思議に窓から見える空へと引きよせられた。何といふ澄切つた空の色だ。何といふそれはさやけさだ。そしてそのさやかに澄切つた大空へと、靜かに、亂れずに立昇つて行く細い煙の姿。しかもそれは私の口が吸つては吐き、吸つては吐きしてゐる煙ではないか。あくまで靜かに、

あくまでもゆるやかに、その紫がゝつた白い煙は、深く澄んだ空へと高く〳〵昇つて行く。そのかぼそい、末は消えてしまふべき運命を持つた一條の煙――私の眼は、私の心は、いつとなしにしみ〴〵とその煙の行末にと引きつけられてゐたのであつた。

その大空の色と、その煙の姿。私はそこに初めてしみじみと「秋」を感じた。「秋は大空より、」「秋は煙の姿より」――その朝私は更にそんなことまで感じたのであつた。

しかし、季節の推移は、必ずしも何々から感じられると限つてはゐない。それは時に全く思ひがけないやうな現象や、些細な事柄から感じられることがある。それは年々に

ちがふ。それは人によつてちがふ。いかに細かな、いかに深い注意を以て觀察してゐる人にでも、季節の推移の眞に感じられるのは、おそらくいつでも「ふとして」であらうと思はれる。

季節の推移は、年々歳々同じやうに繰返されてゐるのであるが、しかし年々歳々にそれは新しく感じられる。「あゝ、もう秋だ！」といつたやうな驚も、年々に新たである。自然は常に新たである。自分の庭にある木や草でさへも、見る度に新たな氣持がする。人間の造つたものは、如何に美しくても、いつかは飽きずにゐられないが、自然の風物は常に新たである。

人間の造つたものでも、自然が與へるやうな、見る度に接する度に新たな感じを與へるものほど貴い。また、何物に對しても、自然に對する時のやうに、常に新たな感じを持ち得る人は貴い。それは幼兒の心だ。生そのものに對して、常に新たな心を持得るものは幼兒である。成人の後までも幼兒の心を失はないものが眞の詩人だと言つたエマスンの言葉も貴い。「野を歩む者」

エマスン　米國の思想家。一八〇三―一八八二年。

三宅やす子　小説家。故理學博士三宅恒方の妻。明治二十三年京都市生。

二八　蟲供養

三宅やす子

二三日前、旅から歸つた主人の口から、ふとこんな言葉が洩れた。

「こんどの休日に、いつか果さうと思つて居た蟲供養がして見たいね。」

三宅やす子

この頃とかく健康のすぐれぬ主人は、二人までも愛兒を失つた悲しい思ひ出を慰めかねてゐた。何となくたよりない、やるせない思が、ふと蟲供養といふことに考へ及んだのであらう。實際今まで研究の爲に命を取つた昆蟲の數は、何萬匹と數へきれぬ程であらう。思へば罪なことである。

研究の爲に作者の夫三宅恒方は、昆蟲學を研究した人。

「友人は大抵供養をしてゐるやうだ。」

「一體どんなことをしたらよいのでせう。」

二人は寄附といふことも考へた。その他の方法も考へて見た。そして結局、死んだ子供たちの菩提寺で御經の一卷もあげて貰ひ、その近所の子供たちにお菓子でも分けてやつて喜ばせようといふことになつて、寺の住職と相談の上、今日の午前をその日と定めたのであつた。

主人はたまの休日を、窮屈な羽織袴に出立つた。私たちの支度もできた。主人は艶子の手をひき、私は三郎を抱いて家を出た。僅か數丁の道ではあるが、三郎を抱いた手に汗がしつとりしたくらゐ、隨分暑い日であつた。寺の玄關に立つて案内を頼むと、十二三の子供が多勢、ばた〳〵と驅けて本堂の後の方に隱れた。今日の催しに集つた子供たちがと思ふと、嬉しいやうな氣がする。

風通しのよい座敷に通されて暫く待つ間、艶子も三郎も嬉しい顏して、庭を眺めたり、風鈴を鳴らしたりしてゐる。其の庭のすぐ下手は墓地で、そこの一番手前には、亡き恒雄と恒二との墓が建つてゐる。

「いつになく親子が揃つた氣がしますね。子供がこゝに二人、あすこに二人。」

と、私は青葉隱れの墓の方をさした。

用意ができたといふ知らせに、皆本堂に行く。正面には「諸昆蟲の靈」と書いた位牌を据ゑて、それ〴〵飾りつけがしてある。住職が座に着くと、やがて他の二人の僧も座に着

いて御經が始まる。先刻奥へ逃げこんだ子供たちが、一列に並んで、行儀よく坐つて御經を聽いてゐる。

やがて御經がすむと、私たちは住職に御禮を言つて寺を出た。一足後れて驅けて來た艶子が、「これ御坊さんに戴いたの。」と言つて、にこ〳〵しながら御菓子の包をさし出した。大方先刻の子供たちも、今頃分けて貰つてゐるのであらう。あの無邪氣な子供たちが、行儀よく坐つて御經を聽いてゐた姿が忘れられない。

「今日はよい心持だ。何となく大變嬉しい氣がする。」

と、晴々した主人の言葉を聞いて、私も非常に嬉しかつた。

「心のあと」

三好學
理學博士。東京帝國大學名譽教授。文久元年岐阜縣生。

庭の面は
源頼政の歌。

二九　月と植物

三好學

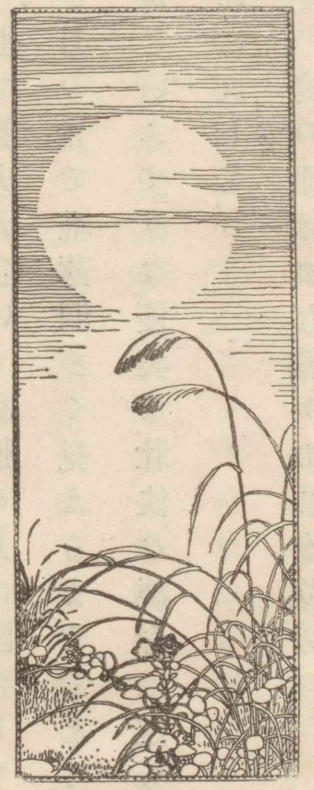
月は季節によつて光の感じが一樣でない。春の夜は曇り勝で朧月が多い。夜櫻を月に配合して見ることもあるが、月の光で唯薄明るく見えるまでで、とても朝日に匂ふ山櫻といふやうな、優美な、壯快な觀念は起らぬ。夏の月はこれに反して、

庭の面はまだ乾かぬに夕立の
空さりげなくすめる月かな

と詠んだやうに快活なもので、殊に木の葉、草の葉に置かれた雨のしづくが月の光に映るときは、一層の涼しさを增す

心地がする。又秋の最中の滿月は、空に冴えて最もあかるく見える。

月夜によい植物はあまり多くはない。かの暗香の浮動を賞する梅なども、花はやはり晝の方がよく見える。又松が月に對して可なり趣のあるのは、杉や樅のやうに、枝がこんもりと茂らないで、針のやうに細長い葉が疎らについて、月の光が葉の間から漏れて來るからである。其角の



暗香の浮動
疎影横斜シテ水ハ清淺。暗香浮動シテ月ハ黄昏。（宋の林和靖）

其角
元祿時代の俳人。榎本氏。

名月や疊の上に松の影

も、松であるからこそ映つた影がそれと知られるので、もしこれが樅や杉又は樫などであつたら、唯眞黑な影がさすばかりで、何の趣もない。蓼太の

さみだれやある夜ひそかに松の月

など、いかにもよく時と處とを聯想させて、僅々十七字の中に無量の意味を含ませてゐる。

其の外柳の月、竹の月、梧桐の月なども、それ〴〵みな多少の趣味をもつてゐる。又秋の野の滿月、夏の曉方の月なども、草原や木立に配合すると、月の情がよくあらはれる。

「植物生態美觀」

蓼太
天明時代の俳人。大島氏。

大塚楠緒子
創作家。文學博士大塚保治妻。明治四十三年歿、年三十六。

三〇　書翰二通

一　觀月の誘ひ

大塚楠緒子

此の金曜日は十五夜の名月にあたり候よし、をさなきものを主人役にいたして粗飯さし上度、御近所の菅様の御子さま方をも御まねき申すつもりに御座候故、篤さまをお伴なひあそばされ、何とぞ御出で下され度、ちひさきが集りて氣儘に遊び候かたはしに、親どもの語り合も、日頃のむづかしき御まじはりとは様もかはり、おもむきも變りて興も異なり候はんか。なにとぞ御くりあはせ五時頃までに御入ねがはしく、篤さまは

梶原緋佐子
女流畫家、歌人。菊地契月に學ぶ。明治二十九年京都市生。

御機嫌次第にてお女中と早うより御出で下されてはいかゞ。或はジョンのお伴も至極よろこばしう存じ候べく、先は御案内まで。かしこ。

二　萩の一もと

梶原緋佐子

ちやうど灯ともし頃に歸りました。あまりコートの色が美しかつたので、晴間になつた夕暮の町が、少しばかり面はゆく思はれました。

本當に有難うございました。袖だゝみの儘ですが、露は拂ひました。

庭の若萩の花は未だほんのつぼみながら、濡れたまの雨傘に添へて置きます。

三一　かぐや姫

尾上八郎

尾上八郎　歌人、國文學者、書家。文學博士。東京女子高等師範學校教授。號は柴舟。明治九年岡山縣生

翁　名は讃岐造麻呂。

一

昔々、ある處に、一人の翁が住んで居ました。野山から竹を取つて來て、色々なことに使ふのを日々の仕事としましたので、あたりの人は此の翁を竹取の翁と申しました。

ある日のこと、此の翁は、一本の、本が光る竹を見付けましたので、不思議なことだと近づいて能く〳〵見ますと、中に三寸ばかりの小さな美しい女の子が居ました。これはと一旦は驚きましたが、自分の子になるべき方であらうと喜んで、手のひらに載せて家に持つて歸つて、妻の嫗に預けて、

籠の中に入れて大切に育てさせました。三月ばかりたちますと、はや髪を上げる程になつて、其の美しくて可愛らしいことは較べるものもありませんでした。それに、此の子の居る所は何時も晝のやうに光りますので、名を「なよ竹のかぐや姫」と付けて、大事に致しました。

其の中に、此の話が世間に知れ渡りましたから、かぐや姫を見ようと思つて來る者が、何時も家の廻りに一面に居るといふ有樣になりました。けれどもかぐや姫は内に引込んで少しも外へ出ませんので、がつかりして來なくなつた者

五人　石作皇子・車持皇子・阿部御主人・大伴御行・石上麻呂。

もございました。併し、此の中に、これにも懲りず、夜も晝も家の前に來て、どうしても一度かぐや姫を見ないでは歸らないと決心をした人が五人ございました。此の人達は翁に賴んで、かぐや姫に其の事を傳へて貰ひましたから、姫も、「それ程の御志ならば、先づ私が所望する品物を持つてお出で下さい。その品物は、佛の御石の鉢と、火鼠の裘と、龍の鰓の玉と、蓬萊の玉の枝と、燕の子安貝とでございます。」と申しました。そこで、五人の人達は急いで歸つて、それ〴〵品物を探しに出て行きましたが、どうしてもそれが見付かりませんので、望を叶へることが出來ませんでした。

此のやうなことから、姫の噂は時の天子樣の御耳にもはひりました。天子樣はそれは不思議と思召して、二度までも勅使をお差向けになつて、宮中へ御呼寄せにならうとなされましたが、これにも姫はお斷を申しあげました。

とかくする內に、三年ばかり過ぎましたが、どうしたのか、春の初頃から、月夜になると、姫は空を仰いでは心配さうな顏付をして、時にはしく〳〵と泣くことがございますので、翁・嫗は不思議に思つて居ました。特に秋になつてからは、月を見ると何時よりも悲しさうに泣出しますので、二人は、「これ程有難い世の中に生れて來て、何を歎くのか。」と申しますと、姫は泣く〳〵、是までにもお話しようかと思つても、御心配を遊ばしてはと今日まで控へて居ましたが、實は、私

は月の都に生れたもので、昔からの深い因縁があつて、此の世界に下つて來たのでございます。併し、此の八月の十五日には、月の都から迎の人が參りますから、是非とも歸らねばなりません。それで悲しくて泣くのでございます。」と言つて泣續けました。

二

姫が月の都に歸ると申しますので、翁も嫗も大層喫驚して、「それは一體どうしたことか。小さな時からこんなに大きくなるまで育て上げたのに、月の都に生れたなどと、そんなことがあらう筈はない。誰が迎に來ても承知する事は出來ない。」と申しますと、姫は「歸るのは本意ではございませんが、致し方がございません。」と言つて泣いて居ました。

此の事を天子樣がお聞きになつて、勅使を以てお尋ねになりますと、翁は泣く〳〵「姫が此の八月の十五日には月の都に歸ると申しますので、それが悲しくて、髮も白くなり、腰も屈み、目も爛れて、大層年が寄つたやうに思ひます。」と申し上げました。天子樣は翁の心を不便に思召されて、「それならば、其の日には數多の兵士を差向けて、迎に來る月の都の者共を殘らず射殺させてやらう。」と仰せられました。

さて愈、十五日になりますと、天子樣からは一人の中將に二千人の兵士をつけてお差向けになりました。是等の兵士は、築土の上、屋根の上、家の隈々まで、それ〴〵手分をして、

弓矢を持つて守りました。嫗は母屋の塗籠の内にかぐや姫を抱き、翁は其の戸を締めて、戸口に立つて、これならばどんな者が來ても大丈夫だと思つて居ました。其の中に夜は次第に更けて、眞夜中頃になりますと、家のあたりがまるで晝のやうに明るくなつたと思ふと、空から清らかな裝束を着けた大勢の不思議な人が、飛ぶ車を一つ持つて、雲に乘つて下りて來て、地から五尺ばかりの所に立並びました。内の者も外の者も之を見て、此處が大事と弓矢を取つて射殺さうとし

ましたが、どうしたものか、手も足も痺れたやうで、唯ぼんやりと見守つて居るばかりでございます。すると、其の中の王様らしい人が翁を呼んで、「汝は聊かな功德を積んだによつて、其の報に暫時の間かぐや姫を降したのである。併し最早時が盡きたから迎に來た。早く姫を返せ。」と申します。翁は物に醉つたやうな心持になつて足も立ちませんから、俯向いたまゝで、「仰のかぐや姫といふは同じ名の人で、他に居られるのでございませう。此の内の姫は、暫時ではございません、永い間私が育てて居ます。それに内の姫のことをしても、此の頃は重い病氣に罹つて居ますから、とても外に出ることは出來ません。」と申しました。王様らし

い人は何も言はずに、すぐに屋根の上に飛ぶ車を寄せて「さ、かぐや姫。」と言ふかと思ふと、塗籠の戸が自然に開いて、かぐや姫は外に出ました。翁と嫗とは俯向いて泣いてばかり居ます。かぐや姫は翁の側に來て、「永い間の御恩返しもせずにお別するのは誠に悲しうございます。併し、これも私の力に叶はないことでございますから、幾重にもお詫を致します。私が歸りますと定めてお歎き遊ばすだらうと、悲しくてたまりません。せめて、私が月の都に昇るのを御覽遊ばせ。」と申しますと、翁は「年寄つた我等を殘して何處に行くのか、せめて一緒に連れて昇れ。」と泣く〳〵申します。

姫も此の樣子を見ては、さすがに心が惑ひましたが、どうすることも出來ませんので、「私が此處に手紙を殘しますから、之を私と思召して御覽遊ばせ。」と言つて、泣く〳〵一通の手紙を認めました。

其の内に、月の都の人は一つの箱から不死の藥を取出して姫に進めました。姫が之を嘗めますと、一人が天の羽衣を取出して姫に着せようと致します。姫は、「暫く待て。一言申し上げて置きたいことがある。」と言つて、又一通の手紙を認めて、不死の藥を添へて、天子樣のお使に渡しました。それが濟むと、すぐに月の都の人は天の羽衣を取つて姫に着せました。姫は其のまゝ車に乘つて、百人ばかりの人々

にお供をさせて、月の都をさして昇りました。

天子様は其の事をお聞きになつて、大層殘念に思召して、「天に近い山は何處か。」とお尋ねになりますと、臣下は、「駿河の國の山が天にも都にも近うございます。」と申しました。それではと、天子様は使に不死の藥を持たせて、其の山の頂上でお燒かせになりました。それからして其の山を不死の山と云ひましたが、今は富士の山といふと申すことでございます。

自修文

一　ウィルヘルム＝テル

松村武雄

松村武雄　文學者、神話學者、文學博士、東京帝國大學講師。明治十八年熊本市生。

ハプスブルグ　瑞西の舊貴族。後、獨墺帝室の祖となる。

西暦一千三百七年、瑞西の民はをかしくもまた苦しい經驗を嘗めさせられた。

ハプスブルグのアルベルト帝の代官に、ゲスレルといふものがあつた。上の威光を笠に着て、さま〴〵の事を企てては、罪もない民を苦しめた。

或時ゲスレルは、人の往き來の多い場所を見計らつて、小高い丘に一本の柱を建てて、其の上に帽子を載せた。そして嚴しく領内の民に命じていふやう、「何人にもあれ、此の路を通るものは、恭しく膝をまげ頭を垂れて、帽子に敬意を拂はねばならぬ。柱にかゝる帽子こそ、忝くも代官の姿と思へ。萬一にも命に背くものがあれば、命を斷ち家を沒するぞ。」といふ。

領内の民は、代官のお觸を聞いて、心の中ではをかしくも、ばか〴〵しくも思

つたけれども、虎の威を借る狐のやうなゲスレルは、我意に募り、横紙破りで名の高い代官である。人々は澁々と帽子の前に頭を下げて通る。代官の仰を受けて帽子の番をしてゐる役人共は、鷲のやうな眼付をして、路を過ぐる人々を監視してゐる。そして帽子に禮をするものを、傲然と高い所から見下しながら、顏には嘲の色を浮かべてゐる。

やがて山住みの男が通り掛かつた。屈强な體を眞直に伸ばして、大跨にゆるゆると歩いて來る。彼の目はひたと柱の上の帽子に向つてゐる。けれども、彼の心には帽子も役人もないのか、何處を風が吹くといはんばかりの顏付である。役人共は憎い奴と睨み付けながら、其の男の近づくのを待つてゐる。すはといはば飛び懸からんずる氣勢である。それを知つてか知らないでか、男はじろりと役人共の顏に一瞥をくれたまゝ、帽子には頭を下げないで、のこのこと通り過ぎようとする。泳へかねて役人共は一齊に呼び止める。

「上意、止まれ。」

横柄な調子である。男は立止まつた。そして、はつきりした聲でいふ。

「何、上意と申されるか。一體何で私をお止めなさる。」

「お上の掟を存ぜぬか。早く此方に來て帽子に叩頭をしろ。」

「何で帽子に叩頭をするので御座るか。」

「默れ。此の帽子は忝くも代官樣の御體と同樣ぢや。」

役人共の嚴しい顏付も、横柄な音調も、此の男の胸には何の恐も起さぬと見えて、飽くまで落着き拂つてゐた。

「私はどうしても帽子に頭を下げるのは厭で御座る。」

役人共はさながら自分の身を嘲られたやうに怒つた。

「此奴横着な。畏多くも代官樣を輕んずる。さあ早く叩頭をしろ。」

けれども男はどうしても頭を下げようともせぬ。泳へかねて役人共は彼に縄を掛けた。そして代官の前に引出した。此の男は誰であらうか。即ちウイルヘルム-テル其の人である。

テルは代官の前に引出されても、惡びれた氣色もない。代官は眼を怒らしてテルを睨んだ。一轍に我意を募らしても、蟲のやうにおとなしく頭を下げてゐた民の中に、かやうな骨の硬い男を見出したのは意外である。けれども、たゞ意外とばかりでは濟まぬは代官の腹の裡である。己が威光を蔑にした

男、己が命令を反古にした無禮者と思ふと、堪へきれぬ怒氣がむら〳〵と心頭にのぼる。代官は高い所からテルを憎さげに見下しながら、どんな罰を加へようかと考へた。

好智に長けた代官は、正面からテルを罰することを避けて、後に廻つてじりじりと苦しめようと思つた。やがて好い思案が浮かんだのか、急に顏色を和げていふ。

「これや、テルとやらいふ男、其方弓の名人といふことぢやが、誰にも後れは取るまいな。」

深い巧のあるとも知らぬテルは、きつぱりと答へた。

「仰の通で御座りまする。」

「よしそれぢや、この方所望がある。」

敵を思ふ壺に陷れた快さに微笑みながら、代官はいふ。

「其方の子供の頭に林檎を載せて、數十間の此方からそれを射て落せ。所望ぢや。さあ、用意をせい。見事林檎が射落せたら、今日の無禮は赦して遣はす。若し少しでも誤つたら、其方の首はないものと思ふがいゝ。」

テルは心の中に「しまつた。」と叫んだ。百歩を隔てて柳の葉を射る腕に覺えはある。けれども代官が射よと望むのは、我が子の頭の林檎である。柳の葉を穿つには胸が騷がぬ。いとしい子供の頭を掠めて矢を放つに、無心でゐられようか。萬が一にも思ふ矢壺をちよつと下に外したら、我が子の命はないものと極つてゐる。テルの胸は千々に亂れて、暫くは何の返答もせぬ。

代官は氣をいらつて、上座から、「どうぢや。」といふ。今はのがれぬところと、テルはきつと代官の顏を睨んで、「承知致した。」と答へた。

と、やがてテルの子が呼び出された。嚴かな一座の氣勢の何となく唯ならぬに、幼き心のさすがに動いて見えた。テルは暫く我が子の顏を見守つてゐた。が、やがて思ひ入つた口調で、

「どうぢや。殿の仰には、其方の頭に林檎を載せて、數十間の此方からそれを射て落せとの仰ぢや。其方は林檎を載せて矢面に立つ氣か。」

といふ。子供ははつと驚いた。頭から冷たい水を浴びせられたやうな心地である。けれども彼は健氣にも氣を取直して、

「お父樣の爲とあれば、矢面に立ちませう。」

といふ。一座の者は覺えず涙ぐんで、代官の顔を見る。代官は眉毛すら動かすことなく、傲然と構へてゐる。

子供は頭に林檎を載せて庭に立つた。數十間を此方に離れて、テルが二本の矢を持つてきつと身を構へる。代官の左右に流るる人々は、固唾を呑んで控へてゐる。テルは弓に矢を番へながら大きな聲で、

「眼を塞いでゐろ。矢が恐くて頭を動かしたら一大事ぢや。」

といふ。親の子とて子供もさすがに膽が太い。彼は平然として、

「恐くはない。お父さんの矢は間違つた事はない。」

といひながら、涼しい眼を睜つて、父の樣子を伺つてゐる。テルは滿月の如く弓を引絞つて切つて放す。途端に彼は覺えず眼を閉ぢた。我が放つた矢の行方を氣遣つたからである。矢は流るゝ星のやうに空を斬つて、發止と林檎を貫く。林檎は小さい音を立てて大地に落ちた。

一座の者は思はず手を叩いてテルを讃へた。代官は案に相違の面貌に、苦しい笑を浮かべてゐる　と、ふと一本の矢がテルの手に殘つてゐるのに氣が付いて、

「手に殘る矢は何の爲ぢや。」

と尋ねた。するとテルは昂然と空に嘯きながら、

「何の爲でも御座りませぬ。林檎を仕損じた折、殿の胸を射拔く覺悟で……。」

といひ捨てて、呆氣に取られる代官を後に、悠々と立去つた。「歐洲の傳說」

芥川龍之介
小説家。東京市の人。昭和二年歿、年三十六。

二　蜘蛛の絲

芥川龍之介

一

或日のことでございます。お釋迦樣は極樂の蓮池のふちを獨りでぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。

池の中に咲いて居る蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、其のまん中にある金色の蕊からは、何とも言へないいゝ匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦樣は其の池のふちにお佇みになつて、水の面を蔽つて居る蓮の葉の間から、ふと下の樣子を御覽になりました。

此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。

すると其の地獄の底に、犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いて居

る姿がお目に止まりました。

此の犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火を付けたり、色々惡事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ善い事をした覺がございます。

と申しますのは、或時、此の男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を擧げて踏殺さうと致しましたが、「いや、〳〵、これも小さいながら命のあるものに違ない。其の命を無暗に取るといふことは、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、とう〳〵其の蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦樣は地獄の樣子を御覽になりながら、此の犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出來るなら此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲を掛けて居りました。

お釋迦樣は其の蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へまつすぐにお下し

なさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりして居た犍陀多でございます。

何しろどちらを見てもまつ暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮上つて居るものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて居て、たまに聞えるものといつては、唯罪人がつく微かな溜息ばかりでございます。それは、此處へ落ちて來る程の人間は、もう樣樣な地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつて居るのでございました。

ですから、さすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

所が、或時のことでございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中を、遠い〳〵天の上から、銀色の蜘蛛

の絲が、まるで人目に掛かるのを恐れるやうに、一筋細く光りながらすると自分の上へ垂れて參るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、思はず手を打つて喜びました。此の絲に縋り付いて何處までも登つて行けば、きつと地獄から抜け出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと極樂へはひることさへも出來ませう。さうすれば針の山に追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

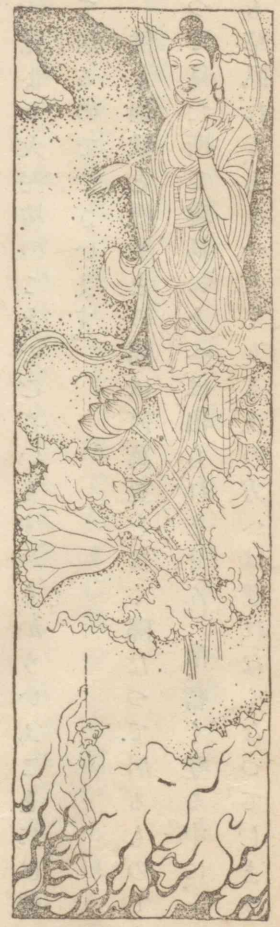
かう思ひましたから、犍陀多は早速其の蜘蛛の絲を兩手でしつかりと摑みながら、一所懸命に上へ〳〵とたぐり登り始めました。

元より大泥坊のことでございますから、かういふことには昔から慣れ切つて居るのでございます。

併し、地獄と極樂との間は何萬里となく隔たつて居るものですから、幾ら焦つて見た所で容易に上へは出られません。稍〻暫く登る中に、とう〳〵犍陀多も草臥れて、もう一たぐりも上の方へは登れなくなつてしまひました。

そこで仕方がございませんから、先づ一休み休む積りで、絲の中途にぶら下

りながら、遙かに目の下を見おろしました。



すると一所懸命に登つた甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう何時の間にか暗の底に隱れて居りました。それからあのぼんやり光つて居た恐ろしい針の山も、足の下になつてしまひました。此の分で登つて行けば、地獄から拔け出すのも存外わけがないかも知れません。

犍陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ來てから何年にも出したことのない聲で、

「しめた、しめた。」

と笑ひました。所が、ふと氣が付きますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限もない罪人達が自分の登つた後を附けて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ〳〵

と一心に攀ぢ登つて來るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くは唯莫迦のやうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへ斷れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう。

若し萬一途中で斷れたといたしましたら、折角此處まで登つて來た此の肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら大變でございます。

が、さういふ中にも、罪人達は何百となく何千となく、まつ暗な血の池からうようよと這上つて、細く光つて居る蜘蛛の絲を、一列になりながらせつせと登つて參ります。

今の中にどうかしなければ、絲はまん中から二つに斷れて落ちてしまふに違ありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人共、此の蜘蛛の絲は己のものだぞ。お前たちは一體誰の許を受け

て登つて來た。下りろ、〳〵。」

と喚きました。

其の途端でございます。

今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶら下つて居る處からぷつりと音を立てて斷れました。

ですから、犍陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくる〳〵廻りながら、見る〳〵中に暗の底へ眞逆樣に落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の絲がきら〳〵と細く光りながら、月も星もない空の中途に短く垂れて居るばかりでございます。

三

お釋迦樣は極樂の蓮池のふちに立つて、此の一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら〳〵お歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から拔け出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、さうして其の心相當な罰を受けて元の地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦樣のお目から見ると、淺ましく思召されたのでございませう。

併し極樂の蓮池の蓮は少しもそんなことには頓着いたしません。其の玉のやうな白い花は、お釋迦樣のおみ足のまはりに、ゆら〳〵と蕚を動かして居ります。其のたんびに、まん中にある金色の蕊からは、何とも言へない好い匂が絶間なくあたりへ溢れ出ます。

極樂ももうお午に近くなりました。

最新女子國文　卷一　終

昭和三年一月三十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和二年九月二十三日印刷
昭和二年九月二十八日發行
昭和三年一月二十日訂正再版印刷
昭和三年一月二十三日訂正再版發行

不許複製

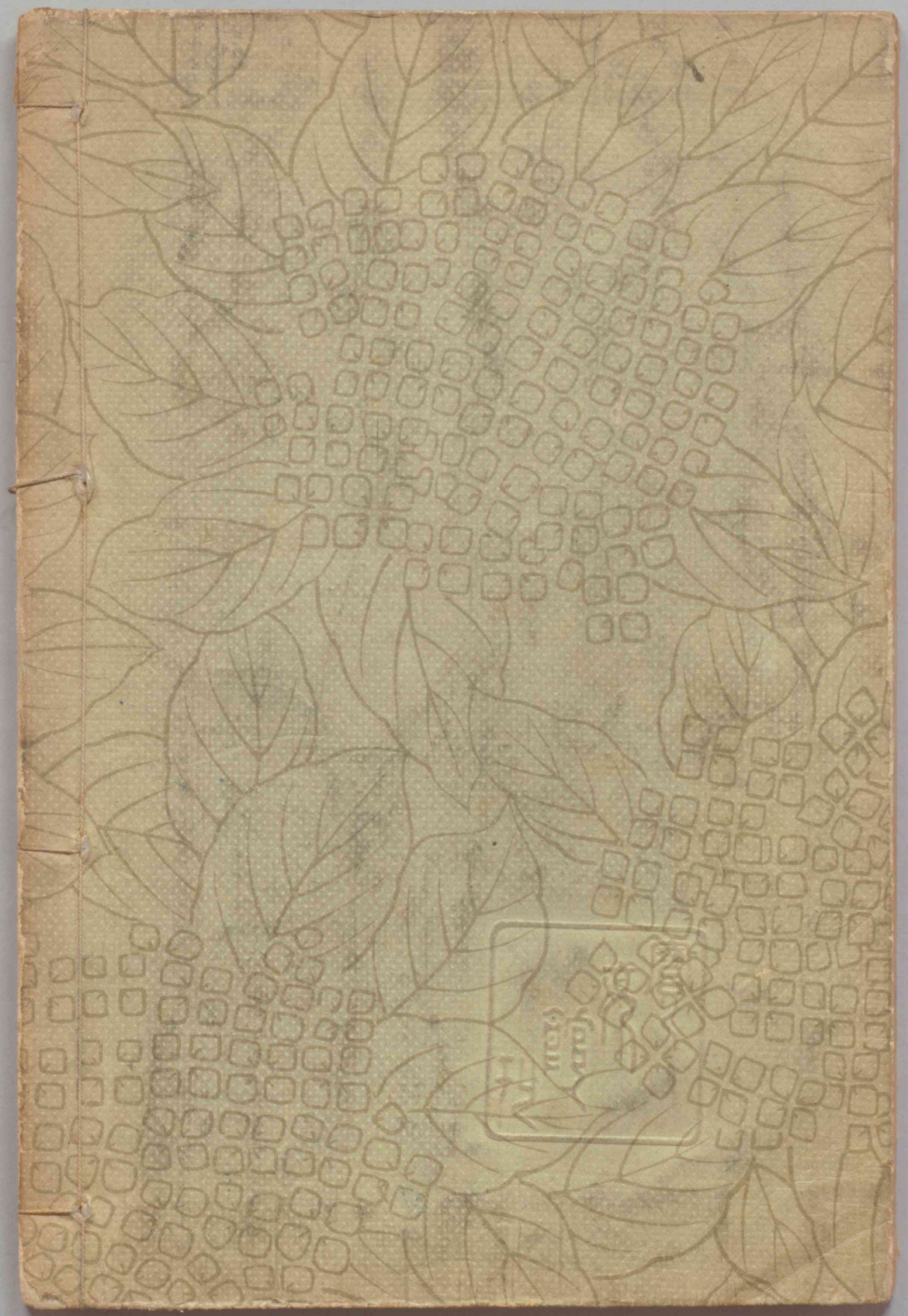
著者　松村武雄
東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地

發行者　大葉久吉
大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地

發行兼印刷者　柏佐一郎

發行所　寶文館
東京市日本橋區本銀町（振替東京二八〇）
大阪市西區阿波堀通四（振替大阪四三）
神戸市元町通五丁目（振替大阪九五二）

最新女子國文

卷別	定價金	昭和五年度臨時定價	卷別	定價金	昭和五年度臨時定價
一	四拾參錢	七拾錢	六	四拾貳錢	六拾八錢
二	四拾貳錢	六拾八錢	七	四拾壹錢	六拾七錢
三	四拾參錢	七拾錢	八	四拾參錢	七拾錢
四	四拾參錢	七拾錢	九	四拾參錢	七拾錢
五	四拾壹錢	六拾七錢	十	四拾參錢	七拾錢

少年百年志